
【琉球・オブ・ザ・デッド】

トムゾンビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【琉球・オブ・ザ・デッド】

【Zマーク】

Z6888T

【作者名】

トムゾンビ

【あらすじ】

沖縄でゾンビが大量発生！ 平和な島は一気にゾンビアイランドと化す！ 主人公のB級ホラー作家のD吾（27歳）と愉快な仲間達は人喰いゾンビ達との生き残りをかけた激しい攻防戦を繰り返す！ 生きていた時の習性を残すゾンビ達！ やがて進化するゾンビ達！ そしてD吾達はゾンビ発生の原因を解明しながら事件を解決するとかしないとか。

LV1【発生】（前書き）

主人公（D吾）の語りから始まる。

LV1【発生】

LV1【発生】

ニュースによると沖縄では2日前ぐらいから死者が蘇つて生きた人間や動物に噛みつき、肉を喰らっているらしい…

蘇った死者は動きは遅いが怪力で、噛みつかれた人間や動物はまるで感染するが如く映画やゲームでよく見られる【ゾンビ】のようになり新たに生者の肉を求めると言つ…

感染のスピードは個人差があるらしいがまだ詳しい事は分かつて無いらしい。

ニュースではゾンビと言わず【暴徒】と言われ、または謎のウィルスによる【感染者】ではないかとの指摘もされているが原因は不明。

感染源や感染経路（空気感染もするのか等）も依然として不明。

YouTubeなどのネットによると肉を喰らう場面が生々しく写されていて“これはゾンビだ！”と言つ声が多数あがつていた。

…おつとー堅苦しい文章ばかりで申し遅れたな！

俺の名は【ロ呂】…！

B級ホラー作家を目指しており、いすれは監督もやってみたいと思っている隠れた天才沖縄人であり、美男子でもある27歳の好青年だ！

だけど貧乏していてなー。

一週間前【弟のまさる】と開発段階で怪しげな試薬品の【ZW】と書かれた青いカプセルを飲む人体実験のアルバイトに行つて来たよ！

何しろ1粒飲むだけで【2万】だぜ！？

怪しいと思ってても金欠病に効く薬なのは間違いないぜ W

それに俺達以外にも何人か来てたしな！

俺はホテルのシーツを洗うランドリー工場で働いてるが今日も工場ではゾンビ事件の話して持ちきりだった！

ただこんな状況だからか休んでる人が多くて仕事が大変だったなー。

今日も夜中までパトカーやら救急車やらのサイレンがうるさい。

…明日も朝7時から仕事だ！

俺は毎日夜10時に寝て朝5時には起きてる。

もう10時になるな…

今日はもう【オ一一】して寝よう…

└▽1【発生】（後書き）

すつせり

ねよねよ(→△^△)

LV2【異変】（前書き）

ちなみにうるさいことをいつぺんに出せるのは日本人だけらしい。

アメリカ人とかはいつぺんに出せないらしいよ。

ローラン・チャック博士

LV2【異変】

LV2【異変】

朝、目を覚ますとやけに明るい…時計を見ると朝の8時…遅刻だ！
俺は急いで水を飲みながら便所でうそりとじつをこっぴんに出し
ながら、会社に電話をかけた！…

あれ？…誰も電話に出んわ…

つまりん洒落を言つてる場合じゃ無い！…

車を出すと外はやたらとパトカーや救急車、消防車が走っていた！

「うわっ！…あちこちで事故つてる！…」

道路は事故車で散乱しており、横転したり火を吹いたりしてゐる車も
あつた。

「ヒドいなこりや…まあ～パトカーや救急車もあちこち走つてるか
ら“何くるなこりやー！…”（何とかなんべ！）」「

俺は車を飛ばして工場に駆けつけた！

だが…工場は稼働しておらず静かだった…

くさこ。…何だこのどよーんとしたくさい臭いは？まるで腐敗臭が
漂つてゐるよつた…

人の姿も見えない…

「お～い…遅刻してすみませ～ん！誰かいませんか～！？」

俺は工場の中に入った…すると悪臭はどんどん強くなり、よく見る
と壁や地面は赤い液体でじゅうじゅうになっていた！

…何だこれは…？【血】…？

俺が口をあんぐり開けていると何やらひつめき声が聞こえた！

「ひ～…ひ～…」

おこねい…何だこの気持ち悪い声は…まるで地獄の底から聞こえ
てくる声のようだ…

とつとも嫌な予感がある…

《アヤ…アヤ…》《ベヒヤ…ベヒヤ…》

足を引かずるような音や湿った音が聞こえる…！

…そしてそれは姿を現した。

「あああ～」

…マジかよ…

それは髪を茶髪にしたキャラキャラした格好の若い工場専属の運転

手だった。

(俺の職場の運転手は大半がこんな感じである)

しかし口の周りは血でベチョベチョだった…

手に何か持つて…

「【手】！？手に人間の手を持つてる！！」

運転手は手に持った【手】をムシャムシャと美味そうに食い始めた

！！

「あわわわわーー！」

俺はこれを見て一瞬のうちにいろんな事が脳裏をよぎったーー！

(“やべ”…“手を喰って”…“ゾンビ！？”…“逃げ”…“恐つ
！！”…“殴れ！！”…“足ガクガクして動け”…)

《しゃーー》

気が付くと俺はナイアガラの滝の如くたっぷりと【おじつ】を漏らしていたーー！

27歳の夏の日の出来事であつた…

そして【元運転手】が俺に気づいた。

「うう…うあああ」

LV2 【異変】（後書き）

おじつじを漏らしてしまった口舌……！

いつたいどりなるんだー！？

LV3【珍トリオ結成】（前書き）

珍妙な2人組が助けに来てくれたぞ！

レバ3【珍トリオ結成】

元運転手が腕をチキンのよひでまおぱりながら俺に近づいて来た！

「つまつま…ひっく…」

俺「うわ…口から垂れた血管がエグい…俺も喰われるのか…？」

その時だつた…！

『バッカーン…！』

いきなり元運転手の頭が血飛沫をあげてそのまま地面に倒れ込んだ
！！

？「男は黒髪[短髪]！」

？「あんらまあ～！」

俺は誰かと思つて見たら、それは同じ工場で働いてる角刈りのおつさんで顔がモアイに似たアゴの長い通称アゴさんと、今年40歳になるミスター・ビーンに似た国吉かずお君だった

アゴさんが鉄パイプでゾンビの頭を殴ったのだ…！

アゴさん「まつたく男がこんなチャラチャラした格好して！日本人は黒髪短髪つて昔から決まってるんだモゴーロ吾はこんな格好するなよーモゴモゴー！」

正直今そんな事はどうでも良かったが、いちおづ助けでもらったのでお礼を言つておいた。

【アゴモアゴモ】といつあだ名もある。ちなみにアゴさんほ蝶の時モアゴする癖があるので【アゴモアゴモ】

かずお「あい～！D吾しつ」漏らしてゐ～！きつたな～い！」

俺「かずおだつて前にうんこ漏らして泣いて帰つたでしょー?あの時呟くやつがいたって言つてたよー。」

アゲさん「そんな事よりここから脱出するモード」

がすお「あじべ~ん、ちやあ~!」

アゴさん「やーうるさい！“まがゝあびーしてからにー”（大声で
叫びやがつてー）」

明らかにアゴさんの声の方がうるさかつたが、アゴさんは単純で短気な性格なので怒つてかずおに【アイアンクロー】をし始めた！！

かずお「へえ～いー！」

「俺、2人とも静かにしないとゾンビが！…ああ！？アゴさん後ろ！」

うあああ

「この間にか一体のゾンビがアーネストに近づいて、いきなりアーネストに噛みついたではないか……！」

アーティさん「あがあ～！？ロボットー！助けてくれ～！…」

しかしゾンビは容赦なくアーティ WANを噛み続けた！

『グチャグチャグチャ――！！』

ରାଜବିନ୍ଦୁ ମହାକବି

「ああ！？アコさんが殺られた！！」

かすおー助けてー!!アンハンダーン!!」

かずおは泣きながら妹妹さんと遊びました!!

しかしその方向にもソンビが！！

! ! }

かすおへえーしー！」

俺一かずおーーー！」

珍トリオ解散だ！！

「珍トロオ結成」（後書き）

「愁傷様です。」

チーン(*ー*)

LV4【初戦】（前書き）

2人は死んでゾンビになっちゃったのでここからはビビりながらも
初バトルです！

LV4【初戦】

LV4【初戦】

彼らはゾンビ達の手中に落した…

そしてあーちゃんを喰つてるのは、小心者で胃が弱いはずの年配の上司の仲本さんだった…

仲本さんは最初あーちゃんのあーじに噛みついてたが、食べにくかつたのか、腹の肉を喰い破り、今や内臓を口に入れ《ぐちゅぐちゅ》と噛んでいた。

「仲本さん… そんなの食べたらまた胃壊すよ…」

そう言いながら、俺はあーちゃんが落とした鉄パイプを拾った

仲本ゾンビが俺を見た…！

「うう？」

《グシャアツ…!》

俺は仲本ゾンビが振り向くと同時に鉄パイプを頭上に振り下ろした

…！

嫌な感触が伝わり仲本ゾンビの頭蓋骨が割れ、

脳みそをボタボタ垂らしながらズサッと地面に倒れた…

「俺は筋トレしてんだバカヤローーー！」

俺は十八番の【たけし】の物まねをしながら言つてやつた…！

ゾンビとは言え初めて人をこんな風に殴つて殺した…

しかし躊躇なんかしてたら死ぬ。

暴力に対抗するには暴力しか無い。

俺はゾンビ小説を書く為にゾンビについていろいろ勉強してたのだ。

頭ではどうすれば良いか分かつてる。

後は勇氣を出して行動するだけだつた。

すると死んだはずのあいちゃんが腸をひきずりながら地面を這いつくばつて来る…

{ もう… }

こんな【ぐちやみそ】の状態で生きてる人間などまずいない…！

俺「うー…やはり死んだらゾンビになるんだ…成仏しきー！」

俺はほふく前進で近づいて来るあいゾンビの頭に思い切り鉄パイプを振り下ろした…！

あいゾンビの頭が肉片や骨の破片をぶちまけ破裂した…！

しかしあ「」だけは頑丈なのか、吹き飛ばすそのまま残っていた…

その調子でかずおとあ「」さんを襲つた2匹のゾンビも片付けた…！

動きがかなり遅いので、思つたより余裕だったが油断大敵である…！

油断は即【死亡「フラグ】に繋がる…！

すると血まみれのかずおがムックリと起き上がつた…！

「うう～～

俺「かずお…お前もか…」

俺は鉄パイプを構えた！

近づくかずお！

俺はとつとつと走つた…

俺「あぶべ～ん？」

「ちや～あ～…～

俺「ええつー…ウーロン…」

「ちや～あ～…～

俺「加藤？」

} もちろん……

俺「……おつかれ帰りました……」

} へえ～い……

かずおジンバはまつりおひでて行つた……

LV4【初戦】(後書き)

いいな、いいな

にんげんつていいな

かえろかえろおうちへかえろ

まん まん まんぐり返しでバイ バイ バイ

└▽5【退職】（退職先）

そんなこんなで退職。

「～5【憑】

「ここからこいつたいぢつなつてんだ?

知能はあるのか?

映画通りのゾンビで噛まれたら感染するのか?

そして何よつぱしてかずおは俺の血の事に反応しておひちに帰つたんだ?

生きていた時の習性がわずかに残つてるのか!?

余裕がある時にゾンビで実験していく調べてみる必要があるな。

…とにかくもつと何か武器にならぬ物を探して脱出しそう。

確か【あれ】があつたはずだが…おつとー??

俺は物陰に身を隠した!!

「ああああ」

何故なら通路には無数のゾンビ達がいたからだ…

ゾンビが腸を奪いあつてる!

まるでウインナーみたいだ!

『ぐひやるーぐぢやびぢやあー』

無我夢中で腸にかぶりつくなぞとんゾンビも柄物のほつかむりをしてるせいかドイツ人っぽく見えて来た！

何だか俺もソーセージつまりにビール飲みたくなって来たぜー。

そう言えば朝から何も喰つてねーや！

生きてこいを出したらどうあえず一杯飲もうー…おや？

あつたぞ！【釘打ち銃】だ！

これやえあればこいに用は無いー

うがああーー

「おおー？工場長ー？」

いきなり工場長ゾンビに組み敷かれてしまったー！

工場長ゾンビが俺に噛みついてるー！

「うわー！力強っー…工場長ー！俺、今日この糞つまらない工場辞めますー！」

俺は釘打ち銃を工場長の頭に一発ぶち込んだー！

うわー

工場長ゾンビは手の動きを止めたが、釘打ち銃は威力が低いのか1

発では死なず、もう2発を眉間に打ち込む事でやっと絶命した！！

工場長ゾンビをどかすとベルトにハンマーが差し込んであったので頂戴した！！

釘打ち銃は重くてけつこうデカいから両手でしか持てないので鉄パイプは泣く泣く手放しす事にした。

「仲間がいれば鉄パイプを渡せるのになあ…さつーもうこんな所は出よつーまずは水と食料を確保しに行こつーーー」

俺はハンマーをベルトに差して両手で釘打ち銃を抱えながら何とか俺の車が停めてある駐車場までたどり着いた！！

車を出して工場を出ると何だか自由になれた気がした。

退屈な毎日、つまらん仕事。

ある意味、俺も死人だったのかもしれない：

LV5【退職】（後書き）

この話じを読むと Hydeのピンクスパイダーが聞きたくなるね。

「レバ【ムナカンギ】（漫畫）

この話の最初のサブタイトル（ミックス版）は「レバ【むなかんぎ】」だつたんですね。

沖縄の方言で（物思い）と言つ意味ですが分かりやすくしていつてこのタイトルに変更しました。

レバ6【ゾンビ】

俺は工場から車を走らせながら考えていた。

…まずはスーパーかコンビニで水や食料とか必要な物を手に入れるか…

今ならまだゾンビの数はそんなに多く無いかもしかん。

食料の確保は他の人間も考えてるだろうし、街がゾンビだらけになつたりしたら街をうろつくのも命がけだし、食料の中には腐る物もある。

時間が経てば経つほど食料の確保は難しくなる。最低一週間は籠城できるぐらこの水と食料は必要だ…

それについてゾンビって臭い。

腐つたらもつと凄いんだろうな…

ここつらひびきつて獲物を探知してるんだー？

視覚？聴覚？嗅覚？

情報が欲しい…

自分でもゾンビを使い直接調べて見なければ…

《ドッカーン！》

そんな事考えて運転してたらこななり飛び出して来たゾンビにぶつかった！！

(多分ゾンビだらうー)

ゾンビは勢いよく回転しながら空を真っ直ぐ舞い、放物線を描きながら7メートルは吹っ飛んで電信柱にもの凄いスピードで顔からぶつかった！！

ゾンビは電信柱から『ベチャツー』って感じで落ちた！！

思い切り投げて壁にぶつかったトマトみたいだつた！！

…呟づけて【ゾンビサイクロン】

…言つてる場合ぢやねえ。

俺は吹つ飛んだゾンビの場所まで車を走らせ運転席の窓越しにから事故現場を見てみるとゾンビの顔はほとんど吹っ飛んで後頭部の当たりしか残つて無かつた！！

グロい…ん？

何か動いてる？…

【うじ虫】ー？

顔の中にびっしりと大量のうじ虫がうじやうじや蠢いていた！！

電信柱を見ると血の流れにそつてそこもうじ虫がびっしりつて

てたのだ！

「ええーーー！」

俺は窓からびちやびちやとゲロを吐いた！！

現場はぐちゃぐちゃの【死体】と【血】と【うじ虫】が乗ったピザに俺が【ゲロ】のトッピングを追加した状態になつた！！

【サンビン】
だ！

これで後は【うん】さえあれば完璧…

「やつけー！（ヤバいー）糞まりたく（糞したく）なつてきただぜ！
せつかくワーチだし」「どうゆうかや？…ダメだー！」させできん
！だつて紙が無いもんー！」

お尻を拭かないで気持ち悪いので俺はけつ拭き紙があるトイレを探しに行く事にした！！

近くに公園があるので公園に向かい窓から様子を見るとゾンビの姿は今の所見えなかつた！ラッキー！

釘打ち銃を持ち車を降りて用心しながらトイレの中に入ると

力アソービー

と言つ声がして俺が

「うわー！」

と呟ぶと同時に俺の肛門から

『ブリッジチャイー』

と音が聞こえたのはまさに同時に事だつた！

「六【ソラノナガ】（後書き）

といひてゐるに違ひじめにあつたよ……

何だ？この主人公……

一つもカッコ良く無い……。

レバ7【便所の女神】（前書き）

公園のトイレって汚いんだよな～。

LV7 【便所の神様】

「カア～！バサバサバサ！」

声の主はただのカラスだった…

カラスはトイレの窓から飛んで行つた…

俺は糞をもらした…

こんな状況ではしょうがないと自分に言い聞かせてもいい年したおっさんが1日に小便とうんこを漏らすと言う大失態を犯したと言つ事実に悔しくて情けなくて涙が出てきた。

トイレは3つあり、俺は泣きながら一番奥のトイレに入った。ズボンとパンツは糞と小便ですっかり重たくなっていた。

俺はパンツをその場に捨てた。

「そうだ…こんな時は歌おう！確か何年か前に【便所の神様】って言つ歌が流行つてたな！あの歌を歌おう！」

俺はうんこをしながら歌う事にした！

「便所には～それは～それは綺麗な～」

『ぶりぶりーーー』

「神様が～いるんやで～」

『ぶりつ・びちーーー!』

「便所の神様は～右手で小便を受け止め～ 左手でうんこを受け止めて～ 口では～タンを受け止めるんやで～ 「

『ぶりつ・ぼとん・ぱちゅん!』

水がけつに跳ね返って来た!!

「うわっ!～うんこの勢いが強すぎておしつておつづが!!汚ねな!! だいたい何で朝も糞したのにこんなに出るんだ!!?」

その時だった!!

『あああ～』

女の呻き声がした!!

「ん? 便所の神様か!!? いや...違つ!」の声は....

『ツカツカ』

『うつう～』

ハイヒールで歩く音が聞こえ【それ】は男子便所の中に入つて來た。

そしておせりげな足音と声を出しながらそれは確実に近づいて來た。

『ぐぬぬぬ....』

『ギイ～』

絶対ゾンビだ…

一番端の便所を覗いてるのか？…

どうして人間がいるって分かるんだ？

『ツカ…ツカ…バタン!』

「うう～？」

「ヤバい…すぐ隣にいる…もひびきやつて来たとかどうでも良い…早くおしつ拭いてこの場を脱出しなければ…！」

俺は急いでおしつ拭きはじめた…！

『カラカラカラーー』

『フキフキフキーー』

「うう～？」

女ゾンビがけつ拭き紙のロールを回す音でこりつづいた…！

『バーン!バーン!』

「あああ～！～！」

「ヤバい…ゾンビの力は強いからドアを破られるかも…！…ああ…でもあと一回はお尻拭かなければ…！」

俺は片手で便所のドアを押さえながらおじりを拭いた！！

「うああ～！～！」

『バーンバーンバーン！～』

「止めろ糞あまー！～！ここには男子トイレだぞー！～！」

LV7【便所の女神】(後書き)

これはピンチだぞーーー！

LV8 【局部はハイになる】（前書き）

おしおきの時間だ。

LV8【局部はハイになる】

俺はズボンを履き、釘撃ち銃を持つトイレのドアの鍵を外して思いきりドアを蹴飛ばした！

すると女ゾンビは吹き飛ばされて派手に地面を転がりながら向かいの壁に頭から激しくぶつかると足を思い切りおっぴろげてケツを真っ直ぐ宙に突き出したままの形で静止した！

俺は女ゾンビに近寄つてよく見てみると、女ゾンビは血まみれだったが、けつこう美人で明るい茶色に染めたストレートロングの髪が似合つてた。

女ゾンビはグレーのオーバーぽい制服を着ていた。

バサッとスカートがめくれて黒い下着が露わになった。

女ゾンビは壁に頭を強打したせいか意識が朦朧としてるらしく、恥を知らねばならぬ格好のまま動く事ができないでいた。

「俺のうんこを邪魔する奴は何人たりとも許さん！」

俺は女ゾンビに歩みよるとおもむろに釘撃ち銃を股間に押しつけてこう言った。

「釘、ぶつこんでやんよーーー！」

釘を6発あそこにブチこんでやつた！

「ああ～…」

「何だ！」こいつ！？気持ち良いのか」「ノホヤロー……」

俺の中の凶暴な【たけし】の人格が再び目を覚ましてしまった…！

「お〇〇んじがダメだつたら菊の門に「ブチ」んでやんよバカヤロー…！」

菊の門にも6発ブチ」んでやつた…！

これでこいつは殺人鬼のアルバート・フィッシュユみみたいな状態になつてゐるはずだ…！

「ああ～…いい～…」

「いいー…」褒美になつちやつてんじやねえかバカヤロー…！」

実験の結果、やはりゾンビは痛みを感じ無い顔をしていた…！

女ゾンビは涎を垂らしてまんざらでも無い顔をしていた…！

「俺の中のたけしの人格まで出させといてナメやがつて…イキそつなのかな？このたけしを怒らすとどうなるか思い知らせてやる…！」

俺は釘撃ち銃を女ゾンビの額に押しつけて力強くこいつを睨つた。

「お逝きなさい…！」

最後別の人になっちゃった。

『バヌツバヌツバヌツ！』

釘を眉間に3発ブチ込むと女ゾンビは息絶えた。

「くつそ…何で生きてる時に出会わなかつたんだ！」

俺は悔しくて壁を殴つた！

『ひっ…』

ヤバい！別のゾンビが入つて來た！

俺は窓から逃げる事にした！

窓をよじ登り窓に頭を入れ周囲の様子をうかがつた。

今視界から見える範囲にはゾンビの姿は無い。これなら車まで行け
そうだ！

俺は窓から体を出し、もう少しで外に出れそうな時に…

『ガシツ！』

「うわつ…？」

ゾンビに足をつかまれたのだ…！

LV8 【局部はハイになる】（後書き）

目指せ！！

実写化！！（

LV9【ア フル！？】（前書き）

1難去つてまた1難。

そしてまた…

LV9【ア フル!?】

ゾンビはあちこち噛い千切られたような跡があり、左腕が無かつた。右腕だけで俺の左足をつかんだのだ！

その唯一の右腕も損傷が酷く腕の肉はあちこちえぐられて骨までかじられた形跡があった。

かなり脆くなつてそうな割には握力は強かつた。

「離しやがれ！死にかけ野郎！」

奴は俺の左足を噛もうとしてたが俺は噛まれ無いように暴れながらゾンビの顔に思い切り蹴りを入れた！

すると脆くなつてた為か、蹴った勢いでゾンビの右腕が俺の左足を握つたまま千切れた！

「うわっ！？こんなもん返すぜーー！」

俺の左足をつかんだまま千切れたゾンビの右腕を外そうとしたがかなり足首に食い込んでいた！

「んぎぎ…くそ！なかなか外れん！…おや？何か千切れた断面の所が動い…うわっ！？うじ虫！？」

またしても大量のうじ虫が蠢いていたのだ！

「気持ち悪つ！…でも…うじって体内にわく物なのか？」

ゾンビに関してはいろいろ疑問はあった…

なぜ死んでるのに動いてるのか？

どうやって獲物を探知してるのか？

どうしてゾンビになるのか？

日本人はタダでさえ手品の種を知りたがる人種である。

ゾンビのちぎれた腕を何とか外して窓からまだ残った片方の手を伸ばしてゾンビに投げ返してやった！

車に戻ろうとすると外から何か音が聞こえて来た。

『チャカツ！チャカツ！チャカツ！』

「おやつ？」

遠くから音がするので音のする方向を見ると電信柱の向こう側から赤黒い何かがこっちに走って来た！

「何だ？何か嫌な予感がするよ？」

だんだんそれが近くまで来た時その赤黒い正体が見えて來た。

俺は戦慄が走った。

それは血まみれのチワワだった。

「ヘッヘッヘッ！」

血まみれチワワは口から涎を大量に垂らしながら俺に一直線に向かつて来た！

「ガアーー！」

チワワが俺を見ている…

そしてチワワが口を開けて俺に飛びかかって來た！

どーする？…

「蹴つとばす！」

俺はどしさにチワワを右足でサッカーボールの如く思い切りシュートした！

『ズバーン！』
「キャーンー！」

カウンターの効果もありチワワゾンビはクルクル飛んで行き、そのまま思い切り壁にぶつかると壁の下にある鉄できた大きなゴミ箱にストーンと落ちた！

そしてその衝撃で「ミミ箱の鉄製の重そうなフタがバターンとしました！」

まだ中でキャンキャンわめいてたが小さなチワワじゃ出て来れない

と思ひ。

「犬までゾンビになるのか！？ 映画によつては人間しかゾンビにならない設定もあるのに！－－ 現実世界じゃ平等らしいな。厳しいね…」

下がる生存率。

LV9【ア フル!?】（後書き）

ちなみにLVとはLEVELの事です。

何のレベルかは：

LV10【酒オーダー】（前書き）

日本酒、バー・ボン、ビールにあぶさん、焼酎、ジ・ブ・ラ・ク、テキーラ
何でも来い！

酒持つて来い！

LV10【酒オーダー】

動物もゾンビ化すると言つ事実にげんなりしながらも俺は車にたどり着いた。

車を見るとバンパーがひしゃげて右側のヘッドライトが割れていた。
さつきゾンビを跳ねた時に損傷したのだろ？。

これではやたらゾンビを跳ね飛ばす訳にもいかんな…

結構爽快だつたけどな。

俺は車に乗り住宅街を運転しながら携帯で彼女のモニカに電話した。

俺「もしもしモニカ～？今ビニ～～」
らしちやつたよ！先にアパート帰つて！籠城するから！俺は水と
食料を取つて来るよ！え？それより酒？バカヤロー！荷物は
持てる量に限りがあるから食料優先だ！酒と食料どっちが大切なん
だ！？え？酒？バカヤロー！え？じゃあ自分で取つて來
る？バカヤロー！命と酒どっちが大切なんだ！？え？酒？
バカヤロー！いーからアパートで待つとけ！」

電話を切つてカーラジオを聞くとニュースがやつてる。

ラジオ「人間が人間を喰い殺すと言つにわかには信じられない事
件から丸2日、犠牲者は増える一方で、感染者に襲われた犠牲者は
感染者になりネズミ算的に増え続け感染者は増大の一途を辿つてい
ます。この惨事に出動要請を受けた県内、県外の自衛隊と沖縄在住

のアメリカ軍が一致団結し、暴徒化した感染者を鎮圧する為に乗り出したとの事。この異常な事態に全隊員に銃火器の使用許可がおりてる模様です。」

「いつどう軍が動いたか…

大事になつて来やがつたな。

動物のゾンビは俊敏さも損なわれて無いし厄介だらうが人間ベースのゾンビならトロイし数で押されない限りは軍が負ける事は無いだろ？…

動物ゾンビのせいで難易度あがっちゃつたけど、唯一の救いはゾンビが昔ながらの歩くタイプだつて事だな。

やつぱり今時のゾンビ映画みたいに走っちゃいかんよ！

それにしても暑い！

窓開けよ。

…ん？…

窓を開けると運転席のサイドミラーに後ろから誰か男の人人が走つて来るのが見えた。

…動物ゾンビに追われてるのかもしけん！

俺は速度を落とし窓から後ろから近づいて来る人に声をかけた。

俺「大丈夫ですか～！？もし良かつたら乗ってください！」

スピードを緩めて車を停めると全速力で走りながらだんだん近づいて来る男は血だらけで、顔の骨が見えてて、腹の辺りからはみ出てる腸が走ってる勢いで上下左右に激しくブリブリ揺れてるのが見えた。

俺「ゆくし（嘘）だろ？…だつて走つてるよ？…」

レバーワークス【酒オーダー】（後書き）

—田舎いなかいが怖おそくて酒さけが飲のめるか—！—

それなら産婦人科で宴会しようかー！？

(このサイトにこの歌詞が分かる人いるかなー?... いねーだろうな
♪)

LV11【疾走系】（前書き）

止まらなければ良かつた…

LV11【疾走系】

俺は急いで運転席の窓を閉め始めた！

《ウイーン…ガシッ！》

しかしあくまで少しだけ閉まると言つ所でゾンビの片手が窓に入つて来て
ゾンビの手が窓に挟まつた！

「うがあーーー！」

その為に俺は自分の頭を左側の助手席の方に傾けたまま住宅街の路
地裏を運転せざるを得なかつた！

車を走らすとゾンビも窓に手を挟んだまま歓ちゃん走りのようにな
ケテケとついて来た！

「ぐええーーー！」

「こいつ…心配してやつたのに險あつとしゃがつて…おや？」

道路の右側に電信柱が見えた。

「この道を行けばどうなる事か…行けば分かるぞーーありがとうー
ー！」

俺は顎をしゃくらせながらつい放つと車を右側に寄せた一気に
車を加速させた！！

「うう？」

『ドッカーン！』

『ぐつちゃあ！』

『バリーン！』

電信柱におもつくそ直撃したゾンビは壁や地面に血肉を撒き散らして瞬時に肉塊へと化した！

しかしその衝撃で運転席の窓ガラスが割れてしまった…

「オーマイガー！！これからは車も安全とは言えんな…」

生身で外を歩くのと車で外を走るのでは恐怖度が全然違う。

そして今まさに車の安全神話が崩れたのだ…

まあそれでも徒步で歩くよりは大分マシだが。

…それにしても疾走系がいるとは…

走るチートゾンビは一見人間が逃げてるように見えるし紛らわしい。

：

それにしても疾走系がいるとは…

走るチートゾンビは一見人間が逃げてるように見えるし紛らわしい。

い。

…まあ～ビニまで持つかは分からんがやれる所まではやつてみよつ。

スーパーかコンビニを田指して車を国道線に出すと朝より車が横転してたり死体の数が増えていた。

その間をやたら飛ばして逃げる車が何台か走り去った。

何体かのゾンビが歩いてその内の1体が走って人間を追いかけてた。

「うがああーー！」

「あやあーーー！」

それट車から引寄せずり出されてゾンビの餌食になってる人達もいた。

「あやああーーー！」

…通り過ぎる。

するとまた襲われる女性が見えて腕に噛みつかれながらも俺を見るやうにした。

女「助けてーーー！」

…通り過ぎる。

最寄りのスーパーが見えたが、ゾンビの数が多くだったので通り過ぎる。

すると水や食料を抱えて走る男が見えた。

男「ゼはあーー・ゼはあーー！」

その男は走つてたが…

『ぐしゃあーー！』

前から来た別の男に横からバットで頭をフルスイングされて頭が潰れてしまった。

さらにその男がバットで殺した男から水や食料を奪つて走り出すと…

『パン！』

前から警官が歩いて来ていきなり銃を発砲した。

男は脳みそを路上にぶちまけて死んだ。

なーんだ…

これは生き残りをかけたサバイバルゲームだったのか。

俺は警官に向かつてアクセルをベタ踏みした。

LV11【疾走系】（後書き）

走る系は反則だよな～（ーー）

まあそれ言つたらバタリアンやデモンズなんか無理ゲー並みの反則度だけなWWW

LV12【自由】（前書き）

まあ、物資調達は必要ですかね。

お巡りが口笛を吹きながら射殺した男の食料に手をかけた。

そして俺は車を加速させてお巡りに突っ込んだ！

「えつ？」って顔で俺の方を見たがまさか車が突っ込んで来るとは思わなかつたのだろう。

『ドッカーン！』

拳銃を身構える間も無くお巡りは回転しながら道路に吹っ飛んでいつた！

わざわざのがゾンビサイクロンなら今のはお巡りサイクロンか？

…などと中2病的な事を考へていると地面に手錠が2錠と、拳銃が2丁落ちていた！

俺は周りに誰もいないか用心深く確認しながら車を降りて戦利品を回収する事にした。

食料の方は水のペットボトルが1つにあとはカーーの缶詰めと豆缶とツナ缶がそれぞれ2缶づつにホットドッグとサンドイッチが1個づつ後は缶コーヒー1本に煙草が1箱あった。

少ないな…これだけの食料で殺し合ひをする世の中になるんだなあ。

俺は朝から何も食べずに動きまわったおかげですっかり腹ペコだつたのでホットドッグとサンドイッチはその場でたいらげ水で流しこんだ。

俺は禁煙中だつたので煙草を吸つか迷つたが、「コーヒーと一緒に吸う事にした!

「スパーー!」

久しづりの煙草は美味くクラッとした。

まさに甘美な毒と言えよつ。

もう値上がりなんか気にせんでも良い。

…どうせこいつまで生きられるか分からんし。

煙草をくわえてワッパを拾つ。

敵を拘束したりいろいろ使えるかも知れないでの2錠とも頂く。

2丁拳銃の方は【ニューナンブ】と言つ日本警察の標準装備の回転式拳銃だ。

弾を確認すると片方に2発、片方は4発入つてた。

…6発か…少ね～な。

2丁もあるつて事は同僚の警官から殺して奪つたに違ひない…

悪いお巡りさんだ！

俺は回収した物を車に乗せて再び車を走らせた。

するとさつき跳ね飛ばした警官が道に転がって、血まみれで足があらぬ方向に曲がりながらもまだピクピクして俺の車に手をむけて恨めしそうな顔してた。

なので俺は《グシャアー！》と車で顔を踏み潰してやった。

サイドミラーで確認すると潰れたトマトのような顔から血が《ドーバーボー》と溢れ出していた。

腐った国家権力を俺のボロ車でひいたり、食べ物や銃まで簡単に手に入るなんて…

これは【自由】だ！

「自由ばっかりーーー！」

思わず呟くんだ。

LV12【自由】(後書き)

ご意見、感想お待ちしております (^_^) v

「▼一三【たかゆ】（繪書）

せひこれ仲間が登場だ！

ＬＶ13【たかゆき】

自由と拳銃を手に入れた俺は意氣揚々と家路に向かった。

もつすぐ俺のアパートについて。

帰る途中で【子供の国】と言う動物園がある。

子供の国を過ぎた所にコンビニがあるのでそこでモット食料を調達しよう！

…子供の国が見えて来た。

その時俺は信じられないものを見た！

? 「ウッキー！」

なんと！

動物園の門の前でスーツを着た【チンパンジー】が親指立ててヒツチハイクしてるではないか！

俺はチンパンの前に車を横付けした！

チンパンはアタッショケースを持っていた。

チンパン「ウッキー！ウキキ！」

俺「何？僕は本土からおばる子供の国で行われるチンパンショー

のイベントの為にやつて来たとても賢いチンパンだ。ＴＶ局のスタッフ同伴で沖縄まで来たのだが、熊やライオンなどの動物及び飼育係やスタッフ全員がゾンビになってしまって命からがら脱出して來たんだ！…だつて？

チンパン「ウツキ～ウキッ！」

俺「何？生存率をあげる為に事態が落ち着くまで行動を共にしないか？僕は賢いし、運動神経もあるし、武器だつてサイズがあれば何でも使える！ゾンビにだつて負けやしないし君の力になれ！…だつて？」

確かに賢いチンパンだ！

何故か俺は彼の言いたい事が分かつた！

俺「よし！乗りなチンパン！そここのゴンベーで酒を取るぞ！…」

チンパン「ウツキー！」

俺とチンパンはゴンベーに入り食料とビールを取り手際良く車に載せた！

その時店員のゾンビが襲つて來た！

「うああ～」

俺「さあチンパンのお手並み拝見といこうか？」

その時チンパンは胸ポケットから【パチンコ】を取り出した！

分厚いゴムのパチンコにパチンコ玉をセッティングして勢いよく伸ばすとゾンビの眉間にぶち当た！

『パチーンー』

パチンコ玉は店員ゾンビの眉間に貫通して脳みそをぶちまけた！

俺「スッゴい威力だ！チンパンの強い握力が成せる技だな…だけど俺達まるで強盗みたいだな！」

チンパンは得意そうな顔で車に乗るとビールを飲みながらタバコを吸い始めた。

俺「何だお前？イケる口だな！そう言えばまだお前の名前まだ聞いて無かつたな！何て名前なんだ？」

チンパンは胸ポケットから名刺をサッと取り出し俺に渡した。

名刺にはひらがなで

【たかゆき】

…と書かれていた。

LV13【たかゆき】（後書き）

最初の仲間がチンパンとは…

面白くなりそうだ(^ ^)

LV14【発砲銃】(前書き)

やっと皿田のアパートに着きました。

LV14【発砲銃】

俺が住んでるアパートに到着した。

車を車庫に入れるとたかゆきが喋った。

たかゆき「ウキキ～？（君が持ってるのは回転式拳銃かね？）」

俺「そうだ。銃は2丁あって片方は2発、もう片方は4発弾が入ってる。」

たかゆき「ウキキ～（少ないな…できれば2～3発ぐらいは残してくれないかね？）」

俺「何故？」

たかゆき「ウキキ～！ウキッ～！（自決用に使いたいのだ！僕は森の賢者と言わてるチンパンの中でも稀にみるエリート中の超エリートだ！あんな醜くて脳みそまで腐った理性のカケラも無くよだれをたらして本能丸出しのバカで下品なゾンビにはなりたくないのだよ！ジエントルメンな僕はスマートで尊厳ある死を迎えるのだよ！だから僕にゾンビ化症状が現れたら君がその拳銃で僕を撃ってくれたまえ！高尚なチンパンのまま死なせてくれたまえ！）

俺「…分かった。」

チンパンの分際でプライドの高いやつちやないと俺は思った。

車を降りて車庫から外に出ると早速死体が2体あった。

まずは犬の死体。

内臓がぶちまけられて横たわってる…

この犬はたまたまゴミ袋を食い破つてゴミを散らかしてゐる近所迷惑な雑種犬だ。

今は自分が喰い散らかされてた。

次の死体は妙だつた…

あお向けに地面に転がつた人間（顔が腕で隠れてよく見えないが女性？）の死体の上に何やら文字が書かれた大きな白い紙が被せられていて、紙の真ん中から長めの刃物で刺されており、刃物で胴体の腹の辺りに固定されていた。

文字は全て英語で書かれおり、一番下の方に大きく【Z】とまるでZを強調するかのように書かれていた。

意味は分からぬ。

俺「近所に住んでるアメリカーがやつたのかや？タダでさえゾンビホラーでいっぱいいっぴいなのになにこの上サスペンスの要素とかいらんよやー。」

「ううえー」

一同「！？」

その時、口が奥歯の方まで裂かれて口周辺の肉がエグられて奥歯モ
ロ出しのゾンビが現れた！

「があああ～」

俺「つわっ！？鉛玉でも喰らえーー！」

俺は二ユーナンブ（4発の方）を取り出しどのゾンビの頭に向けた！

たかゆき「ウキキ～（あつ！むやみに撃つたらダメだ！音で他のゾ
ンビが…）」

『パン！』

近くまで引き寄せ発砲！

手に軽い衝撃が伝わり、乾いた安っぽい銃聲音が響いた！

LV14【発砲銃】（後書き）

この小説：

自分で読んでもすげへ面白っこぞーーー！

LV15【帰宅】（前書き）

拳銃ぐらいなら一般人でもすぐ撃てるかな？

さすがにショットガンとかはとてもじゃないけど無理かもね。

『パン!』

俺は拳銃を口裂けゾンビに向かつて撃つた！

だが外れてゾンビの左耳をかすめただけだった。

俺
あれ？ 当たらん？ もう1発。

たかゆき - ウツギー！（ダメだー！）

ハ
ン
!

今度は眉間に命中してゾンビが倒れた！

俺一どうだ！ゾンビを銃でやつつけたぞ！」

たかゆき「ウキー！」（）んな音が響きやすい所でむやみに撃っちゃダメじゃないか。ゾンビは音による性質があるらしいからな。あんなトロロゾンビー匹なら逃げるかその腰にあるハンマーとかでやつつけなきやー。しかも一発外してるし。弾だつて少ないのにー。」

俺「せっかくやつつけたのにブーブーうるせーな」のチンパンは！
…ん？ やべー！ ゾンビが何匹かこいつて来るー！」

銃声と俺達のやつどつを聞かつたのか「ハハハ」と「ンン」共がやつて來た！

たかゆき「サキー（言こ争ひてる暇は無い！君の部屋に逃げるぞー。）

「

俺達は俺が住んでるアパートの3階を目指して走った！アパートの下にかけつけ階段を登る！

動きが遅いゾンビ共は何とか切り離したがその中に何匹か疾走系ゾンビが混じっていた！

俺達が階段を登るごとにゾンビも走って追つて来た！2匹はいる！

俺「やベーザー！追いつかれるよし拳銃で…」

たかゆき「ウキー！銃はよしたまえ。モグモグ」「

何とたかゆきは【バナナ】を食べてるではないか！

俺「おーーー！こんな時にめやつを食べてる場合か！」

すみとたかゆきは階段を登つた所にバナナの皮をおいた！

ゾンビ達が走つて来る！そして…

『スッテンコロコーンー』

バナナの皮を踏んだゾンビ共はストンのガイルの如く勢いよく一回転すると床に階段を『ドロドロ落ちて2匹は思いきり頭を強打した！

打ち所が悪く2匹の疾走系ゾンビは脳みそをバラまいて死んだ。

俺「なつー？ バナナ一本で殺つちまつた！」

たかゆき「ウツ キーー（これは僕の特技の一つ【ブービートラップ】
さー）」

俺「ブービーなるほどーチンパンだけにねー！」

そんなやり取りをして3階に来た俺達は俺の部屋の302号室にた
どり着いた！

11今まで來るのに半日もかかる無いが、何ヶ月もかかったよう
な気がする…

もう疲労困ぱいだった。

しかし11今まで来ればもう安心だ！

頼もしい相棒もできた事だし

やーかい（帰宅）

……

しかし10吾は気づいてなかつた。

実は先ほどから彼らを監視してゐる怪しい人間がいる事に…

LV15【帰宅】(後書き)

第1部

仕事場から、やーかい、(帰^か宅)編、終了。

「ヤーブしますか?」

【はい】 いいえ

LV16【監視員】（前書き）

第2部【仲間と今流編】スタート！

D町達に迫る怪しき影…

……

D吾達がアパートに来てから部屋に戻るまでの一部始終を黒塗りのワゴン車から双眼鏡で覗いてる黒いサングラスをかけた2人組の男女がいた。

英語で喋ってる事からアメリカ人らしい。

女「やつと戻ったな被験者、山城D吾、」

男「丸刈りに体中に無数の刺青。写真で確認した限り間違いありません。」

女「兄貴の方だな。同じく【ZW】を飲んだ長髪の弟の、山城まさる、もこの付近に住んでるんだろう?」

男「はい。我が班の工作員の情報によると自宅待機してゐます。しかし弟の妻は感染してるようですね。」

女「妻の方はどうでも良い。肝心なのは兄弟が感染してるかどうかだ。妻はゾンビ化してるのか?」

男「現在は分かりません…しかし近所なので兄と連絡して会流する可能性がありますね。」

女「固まつてた方が都合が良い。バラバラだと全てを監視できません。この兄弟は被験者の中でもかなり【当たり】っぽい有力候補だ。こ

の兄弟の件は我々のヤマだ。我々が手柄を取るんだ。他の奴らに取られてたまるか。」

女は拳銃を取り出して言った。

女「他の班の監視員に横取りされそうになつたら隙を見て殺せ。監視カメラには写らないようにしろよ。」

男「…分かりました。所で派遣された自衛隊や特殊部隊の連中ですか…」

女「皆死ぬ予定なんだろ?上層部から聞いたよ。」

男「知つてたんですか!?日本の自衛隊はともかく特殊部隊にはあなたが手塩をかけて育てあげた部下達も大勢いるんですよ!?!?」

女「どうでも良い。私が興味あるのは金と武力と権力と美と快樂だけだ。何人死のうが知るか。」

男「…貴女がそう言う人だつてのは知つてましたが本当に冷酷な人ですね。…仮に私がそうなつても平氣なんですか?」

女「当然だ。そくならんように気をつけろ。」

女は吐き捨てるように言った。

事実女にとつてはどうでも良かつた。

女「第一あの【ジャイアント】も投入されるなら誰が相手でも勝ち目は無い。何しろ戦車だって壊す化け物だからな。イラクに極秘投

入された件ならお前も知ってるはずだ。それにたくさんの各種の進化系ゾンビが軍隊派遣に合わせてこの島でバラまかれるんだろう？ 実戦データを山ほど取るために。」

男「…はい。おや？」

男は双眼鏡を覗きながらいった。その先には【Ｚ】と書かれた紙が貼られた死体がピクピク動いているのが見えた。

男「ジャスト20分！【デビル】覚醒です！」

└▽16【監視員】（後書き）

彼らは何者なのかーー？

そして【デビル】とはーー？

LV17 【テビル】（前書き）

凶悪な進化系ゾンビ

【テビル】登場！

LV17【デビル】

……

地面に倒れてた女の死体がムックリ起き上がった。

その外見は普通のゾンビとは違っていた。

まず顔を含めた体全体の色が赤黒く変色し、無数の血管がいびつに浮き出していた。

目は赤くらんらんと輝き、口は犬のように裂けて広がっており、口中には黄色く変色した汚い歯がズラッと並び、人間の頃と比べ一段と鋭利さを増していた。

そして爪は10センチ程の長さであるでナイフのように鋭くなっていた。

その時化け物の背中の方が蠢き、何かが盛り上がりつて来た！

『ゴキベキゴキ！』
「ペギアアア！」

ビリビリとエシャツを突き破つて出て来たのは何と2本の長い腕だった！

長く赤黒い腕は頭の位置を超えた所で折れ曲がり、まるで悪魔の翼のような形状になつた。

「フシユルルル…」

化け物は変態すると満足そうに歯をガチガチと鳴らしてカクカクと妙な動きをした。

不気味で意味不明な動きだった。

遠くからこの様子を監視員達が見ている。

女「あれが【デビルゾンビ】か。醜悪な化け物だな。」

男「通常デビルと呼ばれます。」

女「何か気持ち悪い動きをしているぞ？あれは何の意味がある？」

男「どうしてあんな不気味な動きをするのかはまだ研究員の間でも詳しい事は分かつておらず、掛け合せたDNAのによるものではないかとも言われていますが…」

女「何を掛け合せた？」

男「カマキリとゴキブリです。」

女「…派生の見込みはあるのか？」

男「研究中です。」

女「おい。デビルが地面の匂いを嗅いでるぞ？」

男「デビルは通常のゾンビより視覚、聴覚などの感覚器官が遙かに

向上しています。特に嗅覚は犬並みです。」

女「計算では〇吾を追つて3階まで登る予定だな?」

男「はい…だけどあいつなかなか行かないな?…まさかこっちに来るって事は…」

男は少し焦った。
しかし女は笑った。

女「それはマヌケだな。大体何の為に私がいると思つてるんだ。」

女は手の指をゴキリと鳴らした。

しかしどビルはアパートの方を見ると素早く走り出し、ピョンと3メートルはジャンプすると壁にひつついてそのままヤモリのように壁をよじ登つた。

男はホッとした。

男「爪の構造により壁を這う能力と従来のゾンビには無かつた跳躍力を獲得してます。」

男は運転席と助手席の間にあるモニターのスイッチを入れた。

モニターにはアパートの壁をよじ登つてるかのような映像が写し出された。

LV17【テビル】（後書き）

中ボスぐらいかな？

レバーア【シカ ハリ】（繪書き）

お久しぶりです。

今回から1話1話の尺を長めにして書いてます。

話しが進むのが遅いからです。

ちなみにダガー（+）は口吾以外の地の語りです。

説明書き忘れてました。

……

アパートの壁をよじ登る『デビルの服には小型の高的能力メラがついていた。』

男『よしー!』のまま3階のD吾達がいる302号室まで行け!』
デビルがこちら側に向かつて来なかつた事に男は心底ホッとしていた。

女『研究所にもこのデビルはいたんだろう? 餌は何をやつていたんだ?』

男『鳥や豚の肉をあげましたね。だけじゃはり人間の肉を好むようですね。』

女『餌は生きたまま放り込んでたのか?』

男『いえ。既に死んだ動物や人間の肉です。』

女『なんだつまらん。…じゃあ生きた餌を補食するのを見るのはこれが初めてか?』

男『そうですね。檻の中では見られないデビルの性質や実戦データの回収も兼ねての事ですので…』

「ぐわふ…ぐわふ…」

モニターから「デビルゾンビ」のくぐもった声が聞こえて来た。

女『ククク…』の仕事は面倒な事も多いが、こういう楽しみもあるからな。早く悪魔が起こす殺人現場を見てみたいぜ。』

男『楽しみなんですか？俺は今日この仕事を考えて夜も寝れなかつたし、今朝も胃が痛くて胃薬を飲んで来ましたよ。あなたは本当にヒドイ人ですね。罪も無い人達を実験台にするのに楽しいなんて残酷過ぎる…』

その時、女がいきなり男の胸ぐらをつかみ拳銃を鼻の穴に押し入れた！

男『ぐわあ！？何を！？』

女『おい、へたれ野郎。まさかこの仕事を抜けたいとかほざくんじやないだろうな？』

女は声のトーンを落とし、冷たい声色で男に言った。

女は黒いパイロットサングラスをかけてるので表情が見えなかつた。

男『いっ…いえ！そんなつもりは…！ただ俺は可哀想だと思つただけ…』

銃を突きつけられて男は恐怖した。

何故なら女はパートナーでもためらひ事無く引き金を引ける事を男は知つてゐるのだ。

この女の非情っぷりは同僚の間でも有名だった。

女『いちこひべソかいてんじやねえよ。お前は黙つて自分の仕事してれば良いんだ。今度弱音を吐いたらお前のヤワな脳みそを吹き飛ばして本部に連絡し、もつと骨のある研究員をよこしてもらう。私ところの時は発言にも細心の注意を払え。良いな? 2度は言わんぞ。』

女はゆっくり銃を下ろしてメンソールの煙草に火をつけた。

男は震えながらも再び安堵した。

あまりの恐怖と緊張の連続で脇汗が凄い事になっていた。

男（…くつそーマジギビッたぜーこの糞アマーー今日は既に本命の仕事をやる前からこのザマだ。これじゃ命がいくつあっても足りねえ！現場は日本の言葉で3Kだと言つが本当だぜー）

ちなみに3Kとは【キツい】【汚い】【危険】と言つ意味である。

男はもう現場には回らず給料が安くてずっと退屈な事務仕事に回してもらおうと本気で思った。

男は改めてこの女と組ませた上役を恨んだ。

ちなみに男はアメリカから来た巨大な闇組織の研究員で短髪の黒人。

女は白人でアメリカの特殊部隊に属しながら闇組織の特殊工作員でデルタもあった。

女の姿は金髪碧眼で黒いパイロットサングラスに黒い戦闘服を身にまとっていた。

長い金髪は後ろで結んで邪魔にならないように束ねてある。

女はゾンビなどから男を守る戦闘員であると同時に男が裏切る場合を懸念しての監視員や処刑人としての役割も持つている。

女は元々アメリカ合衆国の特殊部隊隊長と言つ立場で今回の沖縄ゾンビ事件で沖縄に派遣された。

しかし女はとある闇組織の工作員であり、自分の部下や一般人を上手くゾンビのもとへ誘導して実戦データを得たり、重要人物（政治関係者）などの拉致、沖縄ゾンビハザードで突然変異で発生するケースがあるイレギュラーの特殊ゾンビなどの監視、または血液サンプルの回収、（この任務はかなり危険なので非力な研究員では無理）などの任務を闇組織から承っていた。

組織から複数の任務を与えられていて立場は研究員の男より上なので男にいろいろ命令するだけの権力も持つていた。

男（そうだ！俺も銃を持つてるんだし、いざとなつたら隙を見てこの女を撃つちまえば…！）

女『念のため言つとくが妙な真似をするなよ？お前が銃を構える間に私はお前の眉間に銃弾を3発は叩き込む。私の不意をつけると思うな。私の勘や運動神経、即ち戦闘力は並の軍人を遙かに凌駕する。お前が少しでも妙な素振りを見せたら殺す。これは脅しじゃないぞ。

男『は…は…間違つてもそんな事はしません。』

全てを見透かしてゐようで一部の隙も無くあくまでも冷静な女の隙をつくのは不可能に近かった。

それに男は同僚から聞いた女のあだ名を思い出していた。

女のあだ名は【戦場の死神】である。

男に勝ち皿は無かつた。

その時モニターを見るとテビルが3階にたどり着いてドアの前に立っていた。

「ぐふう…」

男『テビルが目標地点に到着しました!』

〔キシャアアア…〕

『テビルゾンズは4本の腕でドアをバンバン叩いた!

鉄製のドアはミシミシ音を立てていた!』

女『よひひーひつと退屈せずに済みそつだなー。』

男『テビルの力なら鉄製のドアも壊すと思こますー。』

その時ドアに書かれた番号が見えた。

…ドアには【301】と書かれていた。

女『301…隣の部屋じゃねえかバッカ野郎！…』

『バッカーン！』

男『ぶべらつ！…』

女は男の顔に思い切り強烈な鉄拳を叩き込んだ。

レバーライフ【シカ】（後書き）

体調悪いのと仕事が忙しかったので大分書くのが遅れてしましました。

まだちょっと万全では無いし、久しぶりに書いたので誤字脱字があった場合は見逃してちょW

あと久しぶりに書いたのに今回もこいつらの会話だけで終わってると言つ件W

LV19【悪魔のじかん】（繪書セ）

これこれあとで小説書へじこねば なかつたです（^ー^・。）

今日は一回トビハの感ひしきを貯せよといふ回です。

LV19【悪魔のいけにえ】

……

《バーン！バーン！バーン！》

デビルゾンビがドアを猛烈な勢いで叩いていた。

「ぐぎゃるがああーーー！」

デビルと呼ばれた元は若い女性だった彼女は一度死んでアパートの下の路上でゾンビの進化系として復活を遂げた。

彼女は生前の記憶を失っていた。

しばらく眠っていたような感じだった。

気がつけば見慣れぬ土地で何かつまそつな匂いのする匂いをたどりてアパートの壁を登り3階のドアを叩いていた。

夢の中で誰かが命令していたようだった。

誰かを追わねばならないような気がした。

だが誰を追うのか思い出せなかつた。

彼女にはおそらくこれがドアと言う物だと分かっていないはずだつたが、何故かここから入るのが正しいような気がしたのだ。

彼女がまず最初に自覚した感覚は空腹だった。

次に強い破壊衝動だつた。

とにかく何かを壊したい。

今はその感覚だけに支配されていた。

めちゃくちゃに暴れ狂つたら自分の中にある満たされ無い何かが埋まるような気がした。

…その様子を監視員の男と女がモニターで見ている。

女『何がデビルだ。大層な名前をつけやがって。知能も「キブリ並みだなあジエフ?』

ジエフ『スミマセン。ミザリー大佐』

ちなみに白人の女の名前は【ミザリー・チヨーンバース】

黒人の男は【ジエフリー・ローガン】と言う名前で、仲間からはジエフと略される事が多い。

ジエフは殴られた頬をさすりながら首を傾げた。

ミザリー『ちなみに今回の作戦名は何だっけ?』

ジエフ『あ…悪魔のいけにえです』

ミザリーはちよつと笑つた。

ミザリー『本当にロブ博士はホラー映画が好きだなあ。まあ私もホラーと言つかスプラッター やスラッシュ シャー 映画などは好きだがな。実際にコニークな作戦名をつけるなあ博士は…』

その時だった…。

『バーン!!』

『きやあーー!!』

『うわあーー!?』

デビルが301号室のドアを破壊した！

中から女と男の悲鳴が聞こえた！！

ジェフ『今現在デビルが301号室に侵入しました!!』

ジョフが録音装置の小さなマイクにむかって叫んだ。

ジョフに緊張が走る。

ミザリー『いよいよスプラッターショーの始まりか…フフフ』

ミザリーは煙草の煙を吐きながら邪悪な笑みを浮かべた。

モニターにはゴルフクラブを持った40代後半ぐらいの男性と女性が映っていた。

ジェフ『おそれらく彼らは夫婦と思われます…。』

夫婦『ひつ…ひい…?』

男女夫婦は恐怖におののいた。

何しろ田の前にいるのはドアを破壊した醜悪な化け物だった。

化け物の外見は一足歩行の全体的なフォルムこそ人間だが、背中から生えた2本の長い腕やその禍々しい顔は明らかに人間では無かつた。

化け物は夫婦をじっと見ながらじりじりと2人に近づいて来た。

中年の亭主はおびえた顔をしていたが、ゴルフクラブを縦に構えてデビルに向かつて行つた！

亭主『うりやあーー!』

亭主がゴルフクラブをデビルの頭上に打ち下ろす！

『ガシツ!』

亭主『えつー?』

デビルは背中に生えてた左腕であつさりゴルフクラブをつかまえた。

『ズバアツー!』

亭主『熱つ?…さああー?腕があああーー!』

気づいた時には亭主の両腕は切断されていた。

『ザザコー』『ほつへバカなり』『さるな。あの動きは一般人じゃ対処で
あまこ。』

『テビルが背中から生えた両腕で亭主の肩をガツシリ掴む。

『テビルの口が変形して前面に盛りだして来た。

『ベキベキベキ…』
〔ザザキルリラバ…〕

変形したその口の形状はあるでカマキリやコキアフコの口のようだ
った。

亭主『ひこ…よし子…今のおつり絵美を連れて逃げろ…！…
俺はもうダメだ…！…』

妻『あんた…！…』

『テビルはよほど腹が減つてだのだらけ。

亭主の肩を両中の両腕で掴んで自分の顔の位置まで持ち上げると通常の位置にある残りの両腕で亭主の腹をガバッと割き、顔を腹におもむろに突っ込んだ…！

『ぐわ!ふむむ…！…』

『べつせつけびやかやあ…！…』

『テビルはダイレクトに腹に顔を突っ込んだまま物凄い勢いで亭主の

内臓や腹の肉を喰い始めた！

亭主『がはあー…? „じぶふ…!…』

亭主は口から血を垂らし激しくブルブルと痙攣していたがすぐに息絶えた。

妻『いやあー！？あんたー！…』

『ぐちやるぶちゅぐちゅー!…』

デビルが亭主の腹から大腸をくわえて引きずり出した。

妻が泣き叫びながら玄関に向かつて逃げ出した。

しかしそれを見逃すデビルでは無い。

妻が玄関の近くまで来た時にはデビルは一気に飛んで妻との間合いを詰め、かがんだ体制で着地したと同時に妻の両足を瞬時に切断していた！

妻『きやああー！…』

『ガチガチガチガチ！』

両足を切断されて地面に倒れた妻が上を見上げるとデビルが口をガチガチ鳴らしながら妻を見下ろしていた。

妻『ひい！？い…いや…死にたくない…』

妻はあまりの痛みと恐怖で泣きながら狼狽したが両足を切られてしまつする事もできない。

奇しくも恐怖による震えでデビルと同じく歯をガチガチさせるだけだった。

妻『死にたくない死にたくない死にたくない』

『きしゃあああーーー』

妻『いやあああーーー』

ここからは一方的な殺戮だった。

『ズバツズバツズバツズバツズバアーーー』

妻『がはあーーー』『ぶーーきやふーーぐでふちゅーげはあーーー』

『ぐわるるーーー』

妻『……絵……美……』

身動きの取れない妻にデビルが腕を一振りする度、血肉や骨が飛び、腕が飛び、やがて内臓が飛んだ。

デビルは妻の内臓を引っ張り出して地面にまき散らすと、やがて頭をもぎ取り、ぐちゅぐちゅと皿を爪でほじくり出して食べてしまつた。

死ぬ間際の亭主によし子と呼ばれていた妻の身体はあつと言つ間に

デビルにバラバラにされてしまった。

301号室は床中がほとんび血の海になっていた。

ジェフ『オーマイガー…』

ジェフはあまりの惨劇につづむいて頭を抱えた。

ミザリー『汚い食べ方だな。』

ミザリーは平然とした様子で再び煙草に火をつけた。

ジェフはマイクに向かつて再び喋つた。

ジェフ『う…現時点での運動神経、敏捷性、攻撃力はウオーカー、ランナーなど通常のゾンビを遙かに上回る模様。今回の攻撃対象は民間人。ZW被験者の例の兄弟ではありません。』

ミザリー『この時点で実戦値は85はいったんじゃないかな?』

ジェフ『ええ…デビルは賢くは無いですが戦闘力はかなり高いです。』

『

ミザリー『この様子はカメラを通してデータバンクに全て録画されてるんだろう?』

ジェフ『はい。』

ミザリー『これを上手く編集して映画にできないか?博士に頼んだらきっと賛同してくれると思うんだが?』

ジエフ『それマジで言つてるんですか?』

ミザリー』『ネットで有料配信したら儲かるぞ。何しろ本物の悪魔による本物のノンフィクションスナッフホラームービーだ。…いや…それともジャンルはドキュメンタリーにした方がアクセス数増えるかな?』

ジエフ

ガタン！

その時クローゼットの方から音がした！

ぐわぶ！？

ビルがクローゼットに近づいてクローゼットの前で止まる。

ジエフ『なつ』: 何だ!?

ビルはしばらくクローゼットの匂いを嗅いでたが何かに感づいた！

ପ୍ରକାଶକ ନାମ - {

デビルが腕を振り下ろし、クローゼットを破壊した！

すると中から『きやああー』と言う叫び声が聞こえ、小さな何かがデビルの股下を駆け抜けて行つた！

女の子『パパー！ママー！』

女の子は泣きながら玄関に走って行った！

「きしゃあーーー！」

デビルが振り向き、よだれを垂らしながら女の子を追つ……。

『ジエフ・ジージース！』

ミザリー『ハツハツハ！本日のメインディッシュは子羊の活け作りで決まりだな！！』

LV19【悪魔のいけにえ】（後書き）

ゾンビばかり気を取られてアメリカ人の男女の名前なかなか思いつきませんでしたWW

LV20【302回目】（前書き）

監視員、デビル側からロ西達の視点に戻ります。

デビルがクローゼットを壊すと死ぬ間際の親に絵美と呼ばれた女の子が悲鳴をあげながらクローゼットの中から出て来てデビルの股ぐらをくぐり抜けて一目散に走つて行つた！

絵美『きやあー！！』

ジェフ『オーウ！絵美ちゃん逃げ切つてくれー！』

ミザリー『まだ5歳くらいか？体が小さくてデビルの攻撃が当たらなかつたのか…』

絵美は走りながら横田で両親の死体をチラシと見たが、死体は原形を留めていなくまさに【散らばつた肉】と言つた感じで地面に散乱していた。

〔きしゃああー〕

絵美『えーん！ママー！パパー！！』

デビルが血だらけの床を駆け抜けた！

デビルは人間の頃の名残で靴を履いていたのだが、靴からは赤黒い足の指と鋭い爪が靴を突き破つて外に飛び出していた。

足の爪は滑り止めや壁を登つたりする役割を持つていて、ノーマルゾンビがより確実に獲物を追い詰める為に進化した賜物である。

ジエフ『ヤバい！追いつかれる！…』

ミザリー『行けーーー！ブチ殺せーーー！』

絵美『いやーーー！来ないでーーー！』

「がああーーー！」

デビルが死んだ亭主の死体をまたいだ！

その時だつたーーー！

『ガシツ！ビイーン！』

「があーーー？」

デビルが【死んだ亭主の腹からはみ出た大腸】に足の爪を引っ掛け
て、その勢いでそのまま近くの大きな食器棚におもいつきり突っ込
んだのだーーー！！

『ドンガラガツシャアーン！ーーー！』

『ぎへえーーー！』

しかもその勢いで食器棚が倒れて【デビル】は見事なまでに食器棚の下敷きになってしまった！

『ガシャガシャズドーン……グシャアー！』

「ぎゃあああ……」

ミザリー『何だそりやー！？』

『デビルの爪が逆に仇となってしまった。』

まさに【本末転倒】だった。

絵美ちゃんはそのまま玄関にたどり着いてちゃっかりアニメキャラの絵柄が書かれた運動靴を履くと玄関を飛び出して【アリレちゃん】のよひごビローンとびにかに走り去ってしまった……

実は絵美ちゃんは幼稚園のかけっこで余裕で一位を取ってしまった足が早かったのだった。

ジエフ『いやー良かつた！女の子だけでも逃げられて…』

ミザリー『ぐくねえ』

ジエフ『えつ~』

ミザリー『え？じゃあねえよハゲ。何だよ？腸でこけるつて』

ジエフ『まあ…あの…つ…爪が甘かったのかな？なんちって』

ジエフは戸口をつづつロッヒ戸口を出した。

ミザリー『私が求めていたのはな。ホラーなんだ。… できの悪い口
ノトじやあねえんだよ…』

ミザリーはおもいつきりジエフの顔面に蹴りを入れた…！

『グシャアー！』

ジエフ『はべり…安全ブーツド……』

ジエフは蹴られた勢いでそのまま助手席の窓ガラスからガツシャア
ーンと顔を出した。

(Side、ロロ)

+

(エリから話しほど吾達が自宅のアパート302号室にたどり着
いた時に戻る。ビルが覚醒する前で時間軸は301号室の惨劇
から30分前ぐらいである)

俺とたかゆき（チンパン）はゾンビ達を撃退しながら酒や食料を持
ち、やつと自宅の302号室にたどり着いた！

途中で妙な死体があつたがゾンビ共の対応に追われて気にはなつた

が調べる暇が無かった。

俺『いやー戻つて来れただけでもラッシュキーと言ひべきか?』

たかゆき『ウキキー(そつだな!…「わ!…?汚い部屋だな!…ブタ小屋よりヒドいじゃないか!…台所の生ゴミ捨てる場所にウジがウジウジわいてるではないか!』

俺『掃除が苦手で…』

たかゆき『ウッキ〜(まいい…不衛生な場所だが我慢しちゃつ…君の部屋で酒でも飲んでニースでも見ようではないか。)』

?『酒ーー!…』

たかゆき『ウキ!…(何だ!…?子豚!…?ハムスター!…?)』

俺『違うよー!…一緒に住んでる俺の彼女の酒鬼さかぎもにかだよー!…まあ確かに身長小さくて丸顔だけど!』

もにか『お酒ーー酒酒!…』

俺『酒酒つむきよー!…とつあえずビール買つて来たからこれ飲ん…』

『プシコー、ゴブゴブゴブー!』

もにか『プハー!…お酒もつとちよーだい!…』

俺『ちよっと俺らの分が無くなるだろーが!』

たかゆき『ウキキ（アル中の丸顔彼女か…）』

そんなこんなで俺はシャワーを浴びて、ビールを飲み、タバコを吸いながら階とテレビのニュースを見る事にした。

ニュースでは依然として死体が蘇り人を襲っている事、さらに県外、県内の自衛隊やアメリカのデルタ（特殊部隊）が次々に殺られると言う事を告げていた。

現場に行つたキャスター やカメラマンがゾンビの餌食になつている壮絶な映像もあり、まさに南国の楽園のはずの沖縄は地獄絵図と化していた。

どうやらこのゾンビ騒動は沖縄だけで起きていたらしい、さうに空港や船などはすでに運行できる状態では無く、漁港や那覇空港に駆けつけた人達は次々とゾンビに襲われてゾンビ共がごつた返していた。

電話やネットなどは混乱していて朝よりも非常に繋がりにくい状態になつていた。

俺『どうやら現状は混乱を極めているな…やはり下手に出歩くよりは籠城した方が良さそうだな』

もにか『けつ！何がゾンビだバッキヤーロー…ヒック！』

俺『もにか！そんなに酒飲んだらこいつ時に動けなくなるよ…』
もにか『うるへーーもにかにとつて酒は気付けなんだ…このうんこ

たれ！』

俺『なんだとーこのくそもこー』

もにか『くそじじーー』

俺『バカもにー』

もにか『ハゲじじーー』

たかゆき『ウキキー！（君たち喧嘩はよしたまえ！おや！？何か一
ユースに妙な集団が出てるぞ！？）』

ニユースを見ると生放送中のスタジオにマシンガンで武装した黒装
束のやつらが10人ぐらい押しかけスタジオをジャックしていた。
顔に大きな目のマークが縦に入った不気味なデザインの黒装束達は
マシンガンをスタッフやキャスターに向けてこう言つた。

『我々は【死の腕】と云つ組織の者である。この放送局及び古来【
琉球】と呼ばれたこの島を占拠する。』

LV20【302号室】（後書き）

突如として現れた謎の集団【死の腕】とは！？

次号を待て！！

LV21 【死の腕】（前書き）

【死の腕】とはアメリカに実在した闇組織です。
今も存在：

LV21【死の腕】

たかゆき『ウキキー！（沖縄をジャックするだつて！？何だこの糞カルト共は！？）』

俺『死の腕つて…昔実際にアメリカに存在した闇組織じゃないか！』

たかゆき『ウキ？（闇組織？）』

俺『数十年前にアメリカで300人以上を殺した殺人鬼のヘンリー・リー・ルーカスが在籍していた闇組織だ。主な活動内容は誘拐や殺人、拷問じみた儀式や要人の暗殺、人身売買などだな』

たかゆき『ウッキー！（D吾やけに詳しいな？）』

俺『俺はB級ホラー小説を書いてるからそっち方面も勉強してるんだ！』

そう言つと俺達は再び画面に目を戻した。

ジャックされたTV局は【RTV】（琉球テレビ）と言う局で、黒装束達はニュースの生放送中のスタジオに10人ぐらい拳銃やマシンガンなどで武装して乗りこんで来たようだった。

1人が拳銃を持っていて残りの9人はマシンガンを持っていた。

黒装束達は震える音響スタッフに『我々の音声をしつかりと拾え』と命じて黒装束達の衣服に小型マイクを取り付けさせた。

黒装束達は日本語で喋っていた。

死の腕はアメリカの組織のはずだが…

拳銃をもつた黒装束が喋り始めた。

この黒装束は1人だけ右腕に腕章をつけており、自分の事を【ハンド】と名乗った。

ハンド『我々は長い間日の目の当たらない場所で活動してきた組織だ。闇が光を制す時、世界は混沌と破滅に向かう。』

年配の男のアナウンサーが『それはどういふ意味ですか?』と口を挟んだ。

『パン!』

突然乾いた銃声のような音が聞こえた!

アナウンサー『ギギ…!…』

ハンド『百聞は一見にしかず』

ハンドが拳銃でアナウンサーの心臓を撃ち抜いた!

スタジオは悲鳴で溢れ返ったが黒装束達は放送を止めたら全員殺すと言った。

画面からはヒリヒリするような緊張感がTVを見ている俺達にも伝わるほど満ち溢れていた。

ハンド『今は我々がアナウンサーだ。質疑応答の際は手を上げて我々に許可を持ちいるよつて。その君、いいね?』

ハンドは女子アナに向かつてそつと女子アナは泣きながら『はい』と答えた。

ハンドは恐怖の演説を続けた。

ハンド『我々が目指すのは死と暴力がもたらす恐怖による世界征服である。我々はアンダーグラウンドレベルで活動していくが長い年月をかけて徐々に力をつけていき組織を拡大していった。』

黒装束の1人が新聞の見出しを張るボードに沖縄の地図を貼った。

沖縄の地図はほとんどドクロマークが貼られていた。

ハンド『今現在、離れ島を含む沖縄全域で大量発生している活性死者は我々が作りあげた物である。活性死者の感染力は凄まじく、これらを止める事はいかなる優秀な医療機関や軍事力を持つとしても不可能である。また完全に治す方法も存在しない。』

その時黒装束達が射殺したアナウンサーをハンドの目の前の卓上に乗せた。

ハンド『具体的に言えば【ゾンビで世界征服】をするのだ。』

ハンドはいきなり大型のナイフを取り出すと卓上に仰向けに寝かせたアナウンサーのスースを切り破り更に胸部にナイフを突き立ててその身体を切り裂き始めた！

女子アナが隣で震えている。

さうしてハンドは切り裂いた胸部に手をぐりゅぐりゅと突っ込んでくると弾痕のついた心臓をえぐり出した！

俺は知っている。

この心臓をえぐり出すのは死の腕特有の儀式の一つだ。

こつらは本物だ！

ハンド『まず我々はこの琉球を支配する。サイズ的にも気候も、そしてこの封鎖的な環境も各種もうもの条件全てが我々に取って手頃で都合が良いからだ。』

ハンドはカメラを心臓に寄せせるよう支持した。

ハンド『20××年7月3日今日の日付を記念すべき【ハイテー】とする！本日を持っていかなる国もこの琉球に支援などの一切の関係を禁ずる！もし逆らつたら……！』

『グシャアッ！』

ハンドが手に握っていた心臓を握り潰した！！

ハンド『死の腕が世界を握り潰すであろう！』

ハンドの手は真っ赤に染まっていた。

ハンド『今からこの島に近づいた者は問答無用で射殺するか、捕獲

して実験材料にする。ゾンビの餌にするのも良い。そして不法密入国者の国籍を調べあげてそいつの住んでる国に…』

ハンドは数本の注射器がついた銃のような物を取り出した。

これは確かアンプルシューターと言つて小さな注射器を飛ばす銃だ。
ハンド『この【寄生虫】をバラまくー』これはまだ卵の状態だが死体
に打つと…』

ハンドが射殺したアナウンサーにアンプルを打つ。

ハンド『百闇は一見にしかず』

とたんに心臓をえぐり出されたはずの死体が痙攣し、すぐにムツクリと起き上がった。

〔 おもむき 〕

そしてそのまま女子アナを押し倒していくに嗜みついた！

『一時 せひべ せひび せひべ』

女子アナは蘇った年配のアナウンサーに首筋を噛まれて血をゴボゴボ吐きながら死んだ。

そしてすぐに女子アナも血だらけになりながらムツクリと起き上がり
た！

ハンド『我々は琉球を死の島へ変え、世界征服の足がかりにする。我々はこれを【琉球・オブ・ザ・デッド計画】と名付ける!』

スタジオはだんだんゾンビが増えていきパーティクになってきた!

スタッフが襲われ別カメが倒され混乱するスタジオの中で最後に聞こえたのは…

『死の腕に栄光あれ…』

『死の腕に栄光あれ…』

『死の腕が世界を包む…』

『死の腕が世界を覆つ…』

黒装束達がまるで不気味な呪文のようにこの言葉を繰り返した。

そのままフードアウトするかのようにやがて画面にはカラーバーが立ち放送は中断した。

俺達は口をあんぐり開けたままポカーンとTV画面を見ているしかできなかつた…

LV21【死の腕】（後書き）

女子アナ質問する余裕無し。

そりゃそりだよね～

武器紹介（一）（前書き）

【琉球・オブ・ザ・デッキ】に出てくる武器紹介です！

武器の名称、特徴、欠点、攻撃力、使いやすさ、武器の重量（数値が低ければ軽い）、補足…と言った感じで書かれています！

琉球～の世界と照らし合せて、「貴味くださいませや（< w >）

武器紹介（1）

N O . 1 【鉄パイプ】

皆知ってる鉄の棒。

長さは1メートル半ぐらい。

殴るには手頃でリーチもあり威力もそこそこある武器。

攻撃力	3
重量	3
使い易さ	3

属性【打撃武器】

N O . 2 【釘打ち銃】

D吾の職場にあつたネイルガン。

やや大きめの釘を放つ事ができ一応飛び道具になる。

重さがある割に威力は低い…

それでも序盤では頼もしい武器。

ゾンビに対しても目潰しやヘッドラッシュの急所狙いが有効。

攻撃力	1
重量	3
使いやすさ	2

備考 本来の使いの方の方が役に立つかも?

属性【飛び道具】

N O . 3 【ハンマー】

片手で持つサイズのハンマー。手頃で扱いやすい武器。

攻撃力	2
重量	1
使いやすさ	5

備考 ハンマーを使った必殺技

【ハンマースキル】がいくつか存在するらしい…

属性【打撃武器】

N O . 4 【手錠】

その名の通りのワッパ。

ご存じの通り警察などが主に所有しているが、警察だけが持っているとは限らない。

主な使用方法は警察が犯人を拘束する事だが、拘束されるのは犯人だけとは限らない。

プレイにも使えりよ

そんな道具。

属性【拘束道具】

N.O.・5【ニューナンブ】

警察が標準装備してリボルバー拳銃。

38口径弾使用。

ダブルアクション動作射撃。セット可能な弾数は5発と少なめ。

攻撃力 4
使いやすさ 5

重量 3

備考 むやみな発砲に注意。

属性【銃火器】

N O . 6 【パチンコ】

たかゆき（チンパン）が使用。

たかゆきのサイズに合わせやや小型化されてる。

弾は主にパチンコ玉を使用する

ゴムは強力でまたチンパンならではの握力を生かし、射程距離2～3メートル程度なら人間や通常のゾンビ程度の耐久性ならほぼ確実に頭蓋骨を貫通させる事ができる。

弾の面積が小さいので基本的な攻撃力は低いものの、武器の性質上ピンポイントで急所を上手く狙えれば即死させる事ができる。

しかし射程距離2～3メートルを越えると威力が落ちてしまうのが難点。パチンコの性質上、攻撃の際にはタメが必要でまた瞬時に狙いを定める瞬発力も必要とされる。

攻撃力 1／即死

使いやすさ 3

重量 1

補足　たかゆき専用の武器なのでたかゆきしか上手く扱え無い。

属性 【飛び道具】

N o · 7 【バナナの皮】

たかゆきが使うブービーラップの一つ（チンパンだけに）

地面に仕掛けて上手くすれば対象を転ばす事ができる。

主に足止めや牽制に使われるが、転んだ相手は打ち所が悪ければ死
亡する事もある。

攻撃力 0、1～即死

使いやすさ 4

重量 0、1

補足 遥かいしにえからギャグに使われている古典的な小道具でも
あり、天然記念物に指定されている。

これで笑いを取った者は希少価値が高いとして世界遺産指定保護条
約にて【世界ベター愛護団体】によつて保護される。

属性 【トラップ】

武器紹介（1）（後書き）

武器は話しが進むに連れて更新します！

「△△△【モジモジ】（淫靡）

レリード【悪魔のこかげ】の回ヒシノクロあるんですね。

死の腕の恐怖のパフォーマンスが終わり俺達は5分ぐらいいボーッとして俺はこいつぶやいた。

俺『……えーと……もしかして沖縄オワタ?』

たかゆき『ウツキ~(いや世界がオワタ)』

俺『じやあ…ビリする。』

俺はたかゆきともにかを見た。

もにか『ビリする? 酒飲むに決まつてんだろハゲ!!』

もにかは『ゴブゴブゴブーーと酎ハイを一気に飲み干した。

たかゆき『ウキキ~(僕も飲もう! もう少くらんねーー!)』

たかゆきも『ゴブゴブーー! ビールを飲み干した。

仕方ないので俺はとりあえず風呂に入りコンビニで取つて来た弁当やら何やらをみんなに配つて食べた後、リュックサックに食料やらいろんな物を詰めた。

こだといつ時にすぐ必要な物を持つて逃げられるようだ。

たかゆきが酔っぱらいながら荷物を包んでる俺に言った。

たかゆき『ウキキ？（何だね？）この手錠やロープは？（』

俺『殺つた…いや死んだ警官から拳銃と一緒にひょうだいしたんだ！ロープも長くて丈夫そうだし何かに使えるかもしれんと思つてな！』

たかゆき『ウキキ！（なーんだ！僕はつきり変な事に使つじゃないかと期待してたの！）』

俺『この変態チンパンめ！』

たかゆき『ワッキー！（僕は変態といひがの紳士だよ！）』

そんな他愛も無い会話のせつとつをしていたまさにその時だった！

「ぐわああああああああ！」

『バーンー！』

『ああああああああ！』

『わうわう！』

俺『何だ今の音はー？隣の部屋から聞こえたぞー！？』

たかゆき『ウキキウキ！（今の音は僕が聞く限り獸のよくな雄叫びとかが壊される音と男女の悲鳴のよんだと推定されるー！）』

俺『やべー！音が聞こえた方角からして隣の301号室に住んでる中年の夫婦だ！ゾンビに襲われてるのか！？』

たかゆき『ウシ キー！（よく分からんがゾンビにしては雄叫びが元気いっぽこと言つか「トシ 過ぎる感じがするやー。）』

俺『まさか301号室のドアを壊して部屋に入つたんじや……?』

『熱つ~… わよおー? 腕がああぬーーー。』

俺『腕！？腕がいつたいどうしたって言つんですか！？』

俺達はいつせいに部屋の壁に耳をくつつけて物音だけで隣の状況を推測していた！

{ もうやめたー！ }

『ズバツズバツズバツズバツズバアー！！』

『がはあー! ? ジふー! キヤフー! ブドウちゅー! げはあー!』

ぐわるるるー！ー

もにか『ぐでぶちゅ！つてwww』

俺『笑つてゐ場合か！…』これ隣の夫婦揃つてお釈迦にされたっぽいぞ！？隣にはたしか幼稚園生ぐらいの女の子も住んでるはずだ！』

もにか『「愁傷様です』

俺『ちよつと待て！名前エミちゃんだったかな？まだエミちゃんの悲鳴が聞こえてないし、まだ死んだとはかぎらん！ゾンビ一體ぐらいいなら俺達で力を合わせれば何とかなるんじやないか？助けに…』

もにか『行かねーよ！お前一人で逝つてこいハゲ！』

たかゆき『ウツキー！（分からぬのか？隣の夫婦が殺られたスピードが早過ぎるんだ。タダのゾンビじゃないかもしけんのだよ）吾君。）』

俺『えーと…つまりハイリスクなんですね？…』

もにか『お前が死んだら線香べらにさしてやんよ。けつの穴になー』

… そう言つ訳で俺達は満場一致で

【助けない】
と言つ結論に至つた。

隣の親子の『冥福をお祈り致します。

『パパー！ママー！

{ わしゃあーーーー }

俺「聞こえません!! 聞こえません!!」

その後本当にしばらく何も聞こえなくなつた。

俺、化け物はどこに行つたようだな！』

俺達3人はホッとした！

だが

《 キイイイイー！ キイイイイー！ 》

俺『何だ！？この黒板をツメで引っかくような嫌な音は！？』

その嫌な音は玄関のドアから聞こえた！

俺は怖かつたが、そのままにしておくれのあれなんぞ玄関にゆづくつ近づいてみた。

『Kなりトレジ無こりて皿ひヒナ.』

俺『N Kな訳無いだろ!』

たかゆき『ウキキ（口吾用心しろ！スゴくヤバい感じがする！）』

俺『分かつた！』

俺は恐る恐る玄関のドアの覗き穴からゆっくりと物音を立てないように外の様子を覗いて見た！

『ガチガチガチガチ…』

俺『…ひいい！？』

外を覗いた俺はあまりの恐ろしさに叫びそうになつたが瞬時に手で口を押さえた！

たかゆき『ウキ！？ビュした！？何がいる！？』

俺『やつやつヤバい！…そつそつ外に…すつすつすつスゲエのがいる…！』

「V22【お密れ】」(後書き)

果たして訪ねて来たお客さんはZKなのかー?

次号を待て！！

LV23【D君クルー vs テビル】（前書き）

いよいよテビルと主人公の対決！

序盤の中ボスクラスですね！

LV23【D吾クルーヴストベル】

玄関のドアの覗き穴からは赤黒い色の化け物が見えた！

『ガチガチガチ』

歯をガチガチ鳴らして首を斜めに素早くカクカクさせている化け物は腕が4本あり、背中から生えた長い腕は頭より少し高い位置で下の方向に折れ曲がっていてそれはまるで悪魔の翼のようだった！

俺『玄関の外に悪魔がいる！動き気持ち悪っー！』

たかゆき『ウキー！？（何やてーーー！？）』

何故かたかゆきが関西なまりになつたが今はそんな事を気にしている場合では無かつた！

何故なら俺達が思わず大声で叫んでしまつたのが悪魔にも聞こえてしまつたようだつたからだ！

悪魔が覗き穴を覗いたのだ！

俺『ヤバい！気づかれた！』

悪魔と目があつた俺がビックリして覗き穴から首を真後ろに下げて目を離したまさにその時だつた！！

『グサツーーー!』

俺『ひいいーー?』

何と玄関の覗き穴から鋭いナイフのような物が出て来たでは無いか
!?

俺はもう少しで眼球から後頭部まで串刺しこられる所だったーー!

俺『これは...爪かーー?』

たかゆき『ウキキーーー? (どないしたんやロ呑ーー?)』

俺『もつちょいでサンゲリアの惨劇が...ー』

たかゆき『ウキキーーー(何を言つてんねんーー)』

{きしゃあーーー}

『グサツグサツグサツグサツグサツーーー!』

獰猛そうな雄叫びが聞こえ、ドアから無数のナイフ爪が素早く鉄製のドアを何度もやすやすと貫通させて来た!

俺『止めろーーー黒ヒゲドッカンじゃねーんだぞーー!』

悪魔は今度は玄関のドアをバンバンと叩いてきたーー!

叩く度にドアが軋み、蝶番がグラグラして來たーー!

悪魔のパワーは凄まじいのアマジヤもつぱり無し…！

俺『各自リュックを背負つてベランダにロープを持つて繋いでくれ！…下に脱出するぞ…』

もにか『…つたぐみがーなー。酒もゆづく飲めねーぞ…ヒック

…』

俺達は必要な物を背負い、すぐにベランダに行くと廊下で半数にロープを卷いた！

『グワツシャーン…』

『べつえええ…』

俺『ひいい！？部屋に入つて來た…！急げ…』

俺達はもととロープを巻き終えた！

俺『先に行け！俺はこれであの化け物を殺る…』

俺は2丁のニューナンブ拳銃を両手で握り始めた！

たかゆき『わキイー（分かった！）』

もにか『じゃ～頑張れよハゲ～』

囮役を仲間が止めもせずあつさつ受け入れたのにはショックを隠しきれなかつたが

頭を撃てばいくらあいつでも…

もにか、たかゆきの順に下にロープを伝つて降りて行くとベランダ
越しから台所にすゞいビジュアルの化け物が歩いているのが見えた！

カサカサクネクネして奇妙な動きをしており、口の牙や頭から垂ら
した触角に赤黒く艶光りした外皮はどこか、トービーラー、（ゴキ
ブリ）を連想させた。

化け物が俺の方に振り向いた！

俺『うわっ！？キモ過ぎだろ！死ねっ！！』

俺は2丁拳銃を化け物の頭にむけて撃つた！

『パーン！パーン！パーン！パーン！カチッ！カチッ！』

4発撃つたら拳銃は空になつた。

俺『弾少なつ！…殺つたか！？』

…だが…

{ もじやあるーー }

化け物は元気こいつぱいだった。

何故なら【弾丸を腕でガード】していたのだーー！

そして悪魔みたいな化け物が手からほんの少し血を流しながらも自分の血をペロペロ舐めながら俺に向づく近づいて来たーー！

俺『もうやだーーー！』こんな事なら一番先に逃げれば良かつたーーー！

俺はオカマのよひ泣き叫び、再び【おじつ】をたっぷり漏らしてしまったーー！

LV23【ロングクルーソートラベル】（後書き）

またもやおじいさんを漏らしてしまつたロ呂ーーー！

このままデビルの餌食になつてしまつのかーーー？

次号を待てーーー！

LV24【トーナーハー】（前書き）

トーナーハーとは沖縄の方言で「キブリ」と書いた意味です。

LV24【トーナー?】

4発の弾丸を4本の腕で弾き飛ばした化け物はじりじりと俺に迫つて来た…

終わりだ… もう武器が無い！

…おや？

俺はその時洗濯機の横に置いてあつた
【ゴキブリ用の殺虫剤】を見つけた！
ベランダにはゴキブリが多いので洗濯機の横に太陽光に当たらぬ
ように置いてあつた奴だ！

もつれしか無い！

化け物がべろべろ舌なめずりしながら俺に飛びかかるうとしたま
にその瞬間、俺はゴキブリ用殺虫剤を勢いよく化け物の顔に向かつ
て噴射してやつた！

『ブシューーー!』

「ぎゃあああーーー！」

おおー？思つていた以上に効いたーーー！

俺は化け物がのた打ちまわつてゐる間に急いでロープを伝い下に降
りた！

ロープを下に降りる途中で3階から2階にさしかかった時に上から《ズゴン！バゴン！》と震つ凄まじい音がした！

よく見ると化け物が腕をがむしゃらに振り回して洗濯機をめちゃくちやに破壊しているのが見えた。

「うがああああ…」

…じゅやひまだ田が殺虫剤のせいで見えていなこよつだが、かなりお怒りの！」様子（<—>：）

急いで下に降りると下の地面ではたかゆきともにかが待っていた。

たかゆき『ウキキー！（ロロロ…無事で何よつやでーーー。』

俺『2人共さつむじておりやがつて…つーかお前何で関西弁なんだ？』

たかゆき『キキー！（前に関西の方で長らくチンパンショーザの営業してたもんねー興奮するとかまに関西なまりになるんやでーーー。』

俺『そうだったのか…』

たかゆき『ウッキー！（それよりこれからどうするんやロロ…あんな化け物がおつたら命がいくつあっても足らへんでーーー。』

もにか『男なら無い知恵絞つて何か良い案出せくせじじーー。』

俺『お前ら隣の豪邸を見ろー。』

2人は隣の豪邸を見た

もにか『… やーさんの家じゃねえか！ 高そうな酒がありそ'だな！ ヒック！』

そう俺達が住むアパートのすぐ向かいはその筋のお偉いさんが住むと思われる大きな豪邸で、窓からは高そ'うなでっかいツボが見える。

時々、手首まで和彌りの入ったおじさんが水まきをしていたり、黒服のそれっぽい人達がたくさん集まってる事から893の家に間違いは無かつた。

俺『つまり俺が言いたいのはだな。やーさんの家に入つてチャカやらポン刀やら武器になる物を探してごつそり頂こうと販賣だ！』

たかゆき『ウッキー！（やーさんと言えば人間の中でも極めて危険な人種でやないか！ 甲子園球場で阪神VS巨人の試合見た時にいた彼らは凄かつたでーー！）』

俺『大丈夫だよー。じつせこのノリなら、くらやーさんでもゾンビになつてるかゾンビに喰い殺されてるつて！ 武器も取り放題だぜー！』

たかゆき『ウッキー？（うーん… どないしまひょ？）』

俺『いいからその中途半端な関西弁もどきを止めろー！』

（きしゃああーーー）

上から再び叫び声が聞こえたので見ると化け物がまるでトービーラー（「キブリ」のように壁をカサカサと伝つてこつちに向かって来

るでは無いか！

俺『迷つてゐる暇は無い！やーさん家に行くぞー。』

俺は893の家に走った！

LV24【トーナーリー?】(後書き)

893の豪邸は口伝たちの隣近所に実際あります。

LV25 【パンチモン】（前書き）

パンチモン

LV25【パンチセミ】

(S.i.d.e、ミザリー)

ミザリー『D君の奴、殺虫剤でデビルをまいて逃げるとは…一般人にしてはやるな。さすが試薬テストの際ロブ博士が目をつけただけはある。』

ジエフ『デビルゾンビはゴキブリをベースに改造したゾンビですかね。それが仇となってしましました…』

ミザリー『今の所仲間はD君と丸顔アル中女と動物園から逃げ出したスースを着たチンパンジーか。』

ジエフ『長いロープをベランダの手すりに巻いて逃げるなんて手際良いやり方…偶然でしょうか?』

ミザリー『分からん。だが奴らは隣近所の【YAKUNA】の家に行つたようだ。』

ジエフ『YAKUNA?』

ミザリー『ジャパニーズマフィアだ。おそらく武器を調達しに行つたんだろ?…戦場では現地調達が基本だからな。』

ジエフ『なるほど。』

ミザリー『この島はもうすでに地獄と化しつつある。ロブが見込んだ奴らは地獄で生き残れるか?…フフ…楽しくなって来たぜ。』

俺達は 893 の家にたどり着いた。しかし正門は案の定閉まっていた。

俺『やつぱりダメか… 裏口は開いてるかな?』

しかしあはり閉まっていた。

やつぱり考えが甘過ぎたかと思った時 2 階の窓が開いてるのを発見した!

たかゆき『ウツ キーー()』()はチンパンの僕にまかせりー()
いつの間にか標準語に戻つたたかゆきが叫んだ!

俺『分かったーゾンビやーさんは『』をつひー!』

たかゆきが器用に壁をよじ登り、2 階の窓から家の中に侵入した!
俺ともにかはたかゆきが裏口を開けるまで下で待つていた。

ゾンビの唸り声らしき声が遠くの方から聞こえた。

俺はその時もにかの手がふるふるしての『』がつき心配して声をかけた。

俺『もにか大丈夫か? 怖いのか?』

もにか『……や……』

俺『……や？』

もにか『……け……』

俺『……ただの禁断症状かよ！…！』

そしてガチャンとたかゆきが裏口を開けて、手招きして入つて来いと行つた。

正直もにかはこの様子じや使い物にならならいと想つので頬りの綱はこのチンパンだけだと俺は思つた。

中に入ると良く言えば豪華だが悪く言えば成り金な飾りや置物がズラツと並んだ広い応接間が見えた。

俺『よつじ各自武器になる物を探せ！』

もにか『まずは酒だバカヤロー！…！』

もにかは短い足でバタバタと勝手にどこかに走つて行つた。

…アル中め…

たかゆき『ウッキー！（もにかっておしりがぷりぷりしてゐね！）

俺達はタンスの中や階段の下など武器が隠してありそつた場所を探しまくつたがいつにうつて出て来なかつた。

俺『うぐぐモーー出でやしおーー』

たかゆき『ウキキーー（でも）コンベーの件と言ひ僕らのやつてる事
はまるで泥棒そのものだと思わないかね？』

俺『良いんだよードラクHの主人公だつて他人の部屋を勝手に調べ
て、時には勝手にツボを割つて武器や金を盗つて行くんだー俺がや
つて何が悪いってんだ！』

?『おい！ー！ー』

俺『はい！？』

ドスの効いた声が後ろで聞こえたので振り向くと、そこには血まみ
れのドスを持つて手首まで立派な彫りものがあつてこれでもかつて
くらいきつついパンチパーーマの
【それらしき人】が立っていた。

以下この893を【パンチ】と表記する

パンチ『……お前何してるば？』

パンチが低い声のトーンで喋つてきた。

俺『ああ……いやその……ちょっと外が危険なので中に避難させてしまひ
いまして……』

パンチ『……で盗るつもりはないぞ？』

俺『ああこやーーその……身を守る為に……【おチャカ】などをするの

少しの間貸して頂けたらなーと…！けして泥棒などではござりませぬー。』

パンチ『チャカつてこれが？』

パンチは腰に手を回すと銀色の拳銃を取り出した。

それは【トカレフ】と書かれた拳銃で、銀メッキ加工されてる通称【銀ダラ】と呼ばれる暴力団の間では一般的に普及されてるタイプの奴だった。

パンチ『これが欲しいのか？』

俺『…えーと…その…』

パンチ『ハキハキ喋れお前。イライラする』

俺は体全身に冷や汗をかいてオドオドしていた。

ゾンビも怖いが893も怖い。

ここ二つの間は完全にイッていた。

パンチ『俺はお前の頭を撃ちたい。とにかくお前を殺したい。』

パンチがトカレフの銃口を俺に向かえた。

俺『ヤバい！これじゃあおチャカでお釈迦にー。』

LV25【パンチセラ】(後書き)

D吾達はおチヤカでお釈迦になつてしまつのか！？

次回を待て！！

LV26【もにかVSデビル】（前書き）

もにかの初バトル！！

もにかの戦闘力はいかほどの物なのか！？

L V 26 【もにか VHS ビル】

パンチパリマが俺こチヤカを向いた!!

パンチ『脳みそブチまけろやー!』

ハンチが引き金を引いたとしたらまさにその時だつた！

? - て し が 一 ! 五 !

ホーリー・ガーデン!!

卷之三

ハ、手がハシテ頭から腹の子を一矢さばくて尻に倒れか

卷之三

中華書局影印
高僧傳記

もはかはひせかーいた30センチくらいのひーこたん型のどぐりをブンブンとヌンチャクのように振り回していた！

ひょうたんの底から殴り殺したパンチの血がボタボタと滴り落ちていた。

もにか『ひょうたんヌンチャク』！あちよー！』

もにかがひょうたんヌンチャクをブンブン振り回すとひょうたんが

壁にぶつかり、壁が木つ端微塵に砕け散つた！

ビリやらひょううたんヌンチャクはかなりの硬度らしい！

もにか『これにお酒が入つてんだ！ ウイ～ヒック！ お前も飲んでみろハゲメガネ！』

俺『はつハゲメガネ』

俺はひょうたんとつくりに入ってる酒をちよつとだけ飲んでみた。

俺、ふへー!! 何たこの酒!! ? で、じ強きよ!!

その時だつた！！

『バーリン!!』

ぐあああああ！

俺『大変だ！！さつきの化け物だ！！今の騒ぎで俺達の場所を聞きつけたんだ！！』

たかゆき『ウッキー（武器も取つたし脱田丸ー。）』

俺はパンチの死体からドスとチャカ（トカレフ）を取り、裏口に急いだ！

しかし

-{.טביה, עליון, שער}

俺『うわっ！？ヤバい先回りされてしまった！』

たかゆき『ウキキ！ウキー！（奴との戦闘は避けられそうに無いな
……）』

俺『今なら武器もありはするが……3人でかかれば……何とかいける！
……かな？』

……だが正直この凶悪そうな化け物に対して勝てる自信はあまり無かつた

……これでパーティーは全滅か！！

もにか『あ～うるさいうるさい。お前ら邪魔だからどいてさ。こんな、もにか一人で十分だわさ』

俺『ええ！？お前何言つてんだ！？』

しかしもにかは酒を飲みながらよみがへと千鳥足で化け物の方向へ向かっていった！

もにか『かかるて来い虫けらー……ヒック！』

＼があああー！』

化け物がもにかに向かって来た！

俺『ヤバいあいつ酔つて完全に調子のつてるー』

俺はトカレフを構えたが、もにかが前をふらふらしてるので下手に銃を撃つたらもにかに当たってしまいそうなのだった！

たかゆき『ウキキ！（いや待て）吾一もにかのあの動き…ひょっとしたら…（

化け物が4本の鋭い爪がついた腕をこれでもかつてぐりこもにかに向かつてぶん回した！！

俺『ヤバい！…もにかが【三枚肉】に…』

しかし俺の目の前で信じられない事が起きていた…！

『ぶんぶんぶん…』

『ひょいひょいひょい…』

俺『えつ…全部かわした…あんな千鳥足で…』

もにか敵の斬撃をふりふりしながら紙一重でひょいひょいとかわしているのだ！

化け物の爪はもにかにかすりもしていな…！

たかゆき『ウキキー！（やはうそうか…これは【醉拳】だ…）』

俺『醉拳だと…？…まさかそんな…』

もにか『酔えば酔つほど強くなる…』

俺『えつ！？』

その時、化け物の攻撃をよけてばかりいたもにかが反撃に転じた！

ひょうたんヌンチャクをグルグル回して敵の爪をよける度にヌンチャクを化け物の顔や胴体に強力な一撃一撃を確実に化け物にブチこんでいった！！

『ボカンボカンボッカーン！..』

「ぐああああー！？」

もにか『酔えば酔うほど強くなる…ヒック！』

たかゆき『ウツキー！（やつぱり醉拳だ！【本人が言つてるから間違いない】！）』

もにかはひょうたんヌンチャクを化け物のあごにブチかまし化け物を吹っ飛ばした！！

『ボッカーン！..』

「ぐぎゃああー！？」

もにか『遊びは終わりだ虫けら』

その時にかが酒を『アアアア』と口こぼれさせていた！

もにかのほっぺたはまるで

【ハムスターが口いっぱいにひまわりの種をこれでもかつてぐらり

詰め込んだかの「」とく】

大きく膨らんだ！！

俺『何だ！？酒を尋常じゃないぐらい口の中に含んだぞ！？』

もにかが口の前でライターに火をつけた！

もにか『もーーもーーー（【酒ファイヤー】！）』

もにかが口からまるで「ゴジラの」とく化け物に向かつて火を吹いた
！！

LV26【もにか△テヒル】（後書き）

まさか酔拳を使い火まで吹くとは！？

次回を待て！！

（待ってる人いる？w）

LV27【酒豪怪獣モード】（前書き）

あとに怪獣一

LV27【酒豪怪獣モード】

『ブボオオオオーーーー!』

もにかが口から吹いた放射火炎が化け物の体に直撃した!

『ぎやああああーーー!』

強力な火炎をまともに喰らった化け物は瞬時に火だるまになり断末魔をあげて地面をあちこちのた打ち回っていたが、やがて力つきたのかバツタリと倒れて手足を体の中心で閉じるとやがて動かなくなつた。

化け物の体が勢いよくバチバチ燃える度に凄まじい悪臭が漂つてきた。

俺『くつせーーー!』

たかゆき『ウキキ…(まるで悪魔払いだな…)』

俺『死んだのか?虫が死んだ時は足を体の内側に閉じるんだが』

たかゆき『ウキキ!(くたばつたようだ!それにしてもあんな恐ろしい化け物を倒すなんてすごい!もにかがいなければ僕達は殺られてたかもしれない!もにかに感謝!感謝!)』

俺『そうだ!もにか!お前まるでジャッキーみたいな戦いつぱりだつたぞ!えらいえらい!命の恩人!…ん?』

その時もにかは再び

【ハムスターがほっぺたにひまわりの種をこれでもかつてぐらい詰め込んだかの如く】

ほっぺたを膨らませていた!!

たかゆき『ウキー！ウキキ！（ヤバい！こいつまた火を吹くぞー！）』

俺『嘘だろー？酔つてるから敵味方の区別がつかんのか！？』

もにか『もー！もー！（死ねー！酒ファイヤーー！）』

『ブボオオオオー！ー！ー！』

俺『うわあー！ー！』

炎は壁に激突し、辺りはメラメラと炎に包まれた！
た！

炎は壁に激突し、辺りはメラメラと炎に包まれた！

たかゆき『ウッキー！（熱つちー！お尻にかすつたー！それにしても何て凄まじい火力なんだ！まるでゴジラだー！）』

俺『いやー！【モニラ】だーアルコール度数がべらぼうに強い酒をあの風船のように膨らむほっぺたに大量に詰める事で凄まじい火力が

出せるんだ！』

たかゆき『何にせよあの化け物を葬り去つた程の威力だ！僕達がまともに喰らつたら骨も残らず灰になるぞー！』

俺『あつ！？またほっぺたが膨らんでる！』

俺達はもにかと距離を取ろうとした！

しかもにかが吐いた炎で893の家は既に火が燃え移つており、上手く逃げたい場所に移動できなかつた！

俺とたかゆきはあつといつ間に壁に追い詰められてしまつた！

ほっぺたを膨らましたもにかが怪獣の如く鼻息荒く迫つて來た！

もにか『ふーーーーーー』

俺『もうダメか！？』

たかゆき『ウッキー！（やむを得ん！）呪ー！その手に持つてる拳銃でもにかのほっぺたを撃て！』

俺『えつ！？そんな事したらー！？』

たかゆき『ウキキ！（大丈夫！）僕がまた新しい彼女を探してやるー！』

俺『【よし分かつたー】』

俺はもにかにトカレフを向けた！

俺『さらばだもにか！』

その時だつた！

もにか『おえええーーー!』

《ビチャビチャビチャー！》

俺『うわあー！？』

なんともにかは火じやなく【ゲロ】を吐いたのだ！

俺達の顔におもつきしげ口がかかつてしまつた！

たかゆき『ウツ キー！（アルマー二のスーツがー！）』

俺『でも良かつた火じやなくて！だいたいチンパンの分際でブラン
ド物のスープなんか履いてんじゃねえ！』

たかゆき『ウツキー（それにしても… もにかの醉拳は強力だが体への負担も大きいらしいな！なるべくあまり使わせない方が良さそうだな！ いろんな意味で！）』

俺『でもこいつ飲むなって言つても飲むしなあ～』

その時、俺の携帯がブルブル震えた！

俺『あつ！？弟の【まさる】から着信だ！携帯混線して繋がりにくかったのに…』

電話を取るとまさるが出た。

まさる『もしもしロロ君か！？無事か！？』

俺『ああ…いろいろあったが何とか無事だ！そっちは！？』

まさる『俺の、つじ、（嫁はん）が暴れて、でーじ、（大変）なつてるばーよ…』

俺『お前のつじ噛まれたのか！？』

まさる『買い物行つた時に噛まれたって言つてた！病院行こうにもニコース見たらい病院は特にゾンビが多いらしいし…いちおう応急処置はしてベッドに寝かしてたんだが、1時間ぐらいしたらいきなりベッドから起き上がって赤ちゃんを食べよつとしたばーよ…』

俺『マリア食べられたのか！？』

まさる『何とかマリアは取り上げてつじは押し入れに閉じこめたんだが…いつまで持つか分からんし、まだ小さいマリアもいるから何か行動しようにも俺一人じゃ限界がある！俺の部屋で落ち合わないか！？』

俺『分かった！すぐ行ちゅん！』

俺は携帯を切った！

たかゆき『ウツ キー！（ロ呑の弟か！？）』

俺『ああ…嫁はんがゾンビになつて赤ちゃんもいるし身動きが取れんよつだ…すぐ向かわねば…』

たかゆき『ウツ キー！（距離は近いのか…）の辺もねいらへゾンビが増えてるはずだぞ…』

俺『すぐ近くのアパートに住んでる…』

たかゆき『ウツ キー！（だが問題はもにかだ…氣絶してるからおんぶしないといけないぞ…）』

もにか『…うへん…てふてふ…』

俺『仕方ない！俺がおぶつて行へよ…』

俺はもにかはおんぶした。

『ズッシリ…』

俺『おんもー酒ぐせー…ゲロぐせー…』

たかゆき『ウキキー！（思つた事全部言つたね♪大丈夫かね？）』

俺『キツいけど何とか！道中ゾンビに襲われたら援護してくれ…』

たかゆき『ウツ キー！（分かつた…じゃあ弟の家に出来やー…）』

LV27【酒豪怪獣モード】（後書き）

今回は久しぶりにチラホラ沖縄の方言を入れてみました！（^▽^）
この作品の感想をお待ちしております！

登場人物紹介（1）（前書き）

以下【琉球・オブ・ザ・デッド計画】に関わる全ての人物達を紹介していく。

登場人物紹介（1）

佐々木【D吾】

現在生存中

感染はしていない。

【モデル】

作者自身
クリリン

【年齢】

27歳

沖縄人

【戦闘力】

パワー＝やや高め

スピード＝普通

スタミナ＝やや低め

テクニック＝普通（高め？）

根性＝低め

悪運＝高め

【長所】

マイルドな正義感

黒縁メガネ

ハゲ

巨根

【短所】

ヘタレ

すぐ、うんことしつこ漏らす

早漏

【特技】

B級ホラー小説が書ける

無駄に上手いカラオケ

頭に四星球を乗つけてた頃の孫悟飯の物まね

自分の脳みそと会話ができる

【趣味】

エロDVD鑑賞

オーニ

【キャラの特徴】

この作品の主人公で山城家の長兄

しかしゾンビハザード当初からビビって糞尿を漏らしたり、敵から逃げ回ったり、不意打ちで攻撃したりとカッコ良い見せ場がほとんど存在しない。

こんなカッコ悪い主人公でいいのかと言つ声もちらほり出て来ている。

しかし普段はタダのお人好しだがたまに内に秘めた残虐性を發揮する事がある。

親父やもにかに頭があがらない。

もともとは【沖縄のちょっと影がある美青年】をチャームポイントとしていたが、最近は30近い年齢に加え、お腹がぽっこり出て来たので【美中年】になりつつある。

【特殊能力】

? B級ホラーマニュアル

B級ホラーの法則をたどつて
【死亡フラグ】を回避できる。

? スプラッターキル

その名の通り残虐プレイで敵を葬り去る。違う特殊能力
キャラ憑依 との併用可。

? キャラ憑依

【北野武】や【糸由美子】など違うキャラクターを自分の肉体に憑依させて敵を攻撃する特殊スキルでありキャラが憑依するとそのキャラクター（物まね）で敵に暴力をふるう。
精神的、肉体的にも負担が大きいので多用はできない。

【好きな言葉】

『30手前、気分は小6』

『です、ます、しましょ。敬語でセックス』

レバニョ【回つ玉や歯車】（複数形）

今回からナチコーの口調を殿様口調にしてみました！

前のべらんめー口調はやほりちょっと呟があれなんでも

LV28【回り出す歯車】

(S.i.d e///ザリー)

+

ミザリー達は『デビルゾンビ』とロ西達の戦いの一場始終を車内のモニターで見ていた。

ジエフ『火炎で服に取り付けられた監視カメラが壊れ『デビル』の脳内に埋め込まれた生命反応探知用チップから生命反応が消えた…『デビル』は殺されたみたいですね…』

ミザリー『何だ今のは！？あのまる顔、口から火を吹きやがった！まるでガッジーラだ！』

ジエフ『やはりこのエリアはロブ博士が言つた通り戦闘力の高い一般人が潜んでいるみたいですね』

ミザリー『なあにい！？』

ジエフ『ロブ博士はゾンビハザードが起きた3年前からこの沖縄（琉球）と言つ国に潜伏なさっていたのは「そんじですよね？」』

ミザリー『ああ』

ジエフ『各地域事に調査した結果、このうちついに沖縄の真ん中にある沖縄シティーがズバ抜けた奴らが多いそうですが』

ミザリー『どんな奴らがいるんだ?』

ジェフ『まずD吾の父親です。米軍に属する消防士ですが普段鬼のように鍛え上げていて心身共に凄まじいパワーを持っているそうです』

ミザリー『なるほど…他には?』

ジェフ『【J·T·G·G·Y J·A·P】と言つラップコニッシュがいます』

ミザリー『ジギー・ジャップ?ふざけた名前だな。何だそれは?』

ジェフ『沖縄では有名なギャングスタラッパーです。アメリカ西海岸LAのチカーノ(メキシカン)スタイルで私生活も野蛮で凶悪なストリートギャングそのものだと聞いてます。構成員は2~3名ほどです』

ミザリー『日本のラッパーか…くだらん。全てアメリカの真似じゃないか。黒人のお前から聞いてどうだ?』

ジェフ『つて言つた私はヒップホップ自体が嫌いなんで』

ミザリー『なあにい!?』

ジェフ『今現在、別の調査部隊がジギーらしき人物を見張っています。身長が小さくて全身刺青だらけの男とスキンヘッドでヒゲを生やした巨漢の男の2人がいるそうでジギーのメンバーに間違い無さそうです。チビの方が敵対してたギャングのメンバーを数人殺害した容疑で逮捕されてて今日パトカーで沖縄警察署に護送されている

はすですが…』

『ペペー...ペペー...ガガガ...!』

その時車内の無線がなつた！

無線『こちら02部隊！現在エリアG-報告...ジギーのメンバーの1人のチビの方は護送中ゾンビハザードが起きた後その混乱に乗じてパトカー内の警察を何らかの方法で全員殺害して逃亡した模様です！』

ミザリー『ほりっ!』

無線『その後チビは警察の手入れ対策として隠していたと思われる武器を格ポイント事に回収して巨漢の方と合流！合流後もゾンビや一般人問わず殺害や強奪、レイプを繰り返しております！』

ミザリー『...ここらむろ吾達とは仲間なのか？』

ジエフ『違いますね。お互い顔や名前は知っているようですがむしろこの状況ではお互い敵同士になる確率が高いですね』

無線『尚、ジギーは軍人や特殊部隊なども襲つて殺害し、武器や金品、食料等を奪つているようです！戦闘力は非常に高く性質は非常に好戦的で極めて残忍！近距離で接触したら交戦を避けるのは困難なので充分用心してください！』

ジエフ『分かった！お前らも充分気をつけるよつて...通信終了！』

ミザリー『…ふん…ギャング気取りのチンピリ共が…』

ジェフ『特殊部隊も殺害してるから真似とかギャング気取りってレベルじゃないですよ！それにエリアGってすぐ近くですよー・鉢合わせになつたらかなりヤバいんじゃ…』

ミザリー『アマチュアにしてはやるようだが、所詮はアメリカの一番煎じ、力合つたらこのミザリー様が本物のアメリカン魂スピリチュアルを叩きこんでやるわー』

ジェフ（それにしてモロ西達とジギージャップが仲間じゃなくて良かった…徒党を組まれたらさすがにいくらミザリーでもヤバいだろう…）

ミザリー『貴様何か言いたそudsな？』

ジェフ『あ…いや…他にもまだいますー』

ミザリー『まだいるのかー？』

ジェフ『車椅子の郵便屋さんです』

ミザリー『なあにいー？』

ジェフ『10代の頃に飲酒運転で事故を起こして【両足を膝の付け根から切断】両足を【義足】で補つて車椅子で生活しています。』

ミザリー『ふーん』

ジエフ『その後自暴自棄になり【地球に巨大な隕石が落ちればいいのに】が口癖でしたが友人のアドバイスにより郵便屋さんになり、自ら特殊改造を施した【スーパー車椅子】で荷物を配達してゐるそうです。ハンディを背負つた郵便屋さんとして地元メディアでも取り上げられたそうです』

ミザリー『なるほど…そいつは戦闘力は高いのか?』

ジエフ『それは彼の車椅子と義足に秘密があるそうです。尚データによると彼の名前は【しゅん太】D吾達の仲間だそうです。』

ミザリー『なあにい!?』

『ピピー！ガガガ！』

ジエフ『また無線か!?』

無線『こちら03部隊！現在エリア具志川シティー！』

ジエフ『沖縄シティーからけつこう離れた町だな?』

無線『はい！現在ターゲットのしゅん太を追跡中！もの凄い早さで沖縄シティーに向かっています！目的はD吾達と合流する為と思われます！』

ミザリー『なあにい!?…って言つか凄い早さで向かってるつてまさか…!』

無線『はい！車椅子です！ターボエンジンが搭載してゐるのか、車ま

でも追いつくのがやっとの有り様であります……。』

『ナニー『なあここー!?』

「V28【回つ出す歯車】（後書き）

久しぶりの投稿なのにまたしてもここにいつりの会話だけで終わってしまいましたw

この作品の感想、ご意見をお待ちしております。(^ - ^)o

レバ29【もぐもぐウォッチング】（前書き）

最近ノーマルゾンビやん達を出して無かつたんで今日はゾンビ特盛りで！

レバ29【もぐもぐウォッキング】

(S.i.d.e、D君)

俺『もにかをおんぶしての移動はキツいな~』

たかゆき『ウッキー! (前方にゾンビ発見!)』

見ると各所にいたる所にゾンビがいてそれぞれがお肉をもぐもぐしていた。

俺『…ゾンビさん達はお食事中なのだからけっして邪魔しないよう通らなければ…』

…しかし興味深いのでバレないよう通り過ぎながらゾンビさん達を【もぐもぐウォッキング】する事にしました(^___^) v

『ぱちぱちぱちーーー!』

皿田を踏みのよひしやぶるゾンビさん達

ちやふちやふ舐めたが、やがて飽きたのかそのまま

『ぐひゃあーー!』

と口の中で噉み潰してしまいました(^___^)

『ビックチャーノー』

手で千切った肉片をこれでもかってぐらに顔に呑みつけるシンビセ
ン。

湿布の跡ひでひへてひつけた肉片を

『ザザザラーニー』

と勢こよべ吸つて喰べちゃこました（～）

「べがひー・べがあひー・」

「あむるー・」

手に取つた肉片をバーゲンセール呑のりとて取つ合ひませわニジン
ビタニ達。

やはつ生きてた時の習性が色濃く残るのでしょ「うか？」

微笑ましい光景ですか（< >）

…何とか通り過ぎながらあるアパートの前に立った！

…しかし…

『べべべべべべべべ…』

俺『何でアパートの階段の前でお食事会を…』
たかゆき『カシキーラ（それは彼らの考え方が【ストリートその物】だからだ…）』

「うがあ～！」

俺『シャレた事言つてる場合ぢやないぞー！』ついでに『…』

たかゆき『ワッキー！（仕方ない…）』なつたらひの頭の持つてゐる拳銃と僕のパチンコで撃退するしか無い…）

俺とたかゆきは銃とパチンコで攻撃して1体ずつ倒していったが後の方からもわらわらとゾンビ共がやって来た！

「べがあ～！」

「…」

俺『べ…ヤバいぞー…囲まれた…』

たかゆき『ウキキー…（せつまつこやーーー…）』

だがその時だった…！

?』【車いすアターック】—..『

『グシャアツ！..グチャベチャーン！..』

俺『何だ！..ゾンビ達が吹っ飛んで壁に叩きつけられたぞー！..』

?』【足は無くても足まわりOK】—..『

俺『まさかお前は！..』

しゅん太『ポストマンしゅん太！..只今参上！..』

俺『おお…完全に【出オチ】じゃねーか！..』

LV29【もぐもぐウォッキング】（後書き）

新キャラ、車いすの郵便屋さんしゅん太登場！

自分で書いてこの話し大丈夫か？って思つ30手間のアラサー作家

家www

久しぶりの
懐メシ
です！

レバロ【80年代風ドタバタ「メトリー】

しゅん太『おいらが来たからにはもう大丈夫でやんすよお師匠さま
『！』

リストのような顔したしゅん太はキツラキラした目で俺を見つめながらさう言つた。

そう。車いすに乗つた彼は俺の弟と同い年の友達なのだが、彼はどう訳か俺の事をしこたまリストペクトしている。

しゅん太『おいら、お師匠さまの事お守りするでやんす！』

そして俺の事を恥ずかしげも無く

【お師匠さま】
と叫つのだ。

ここつはこの世で唯一、俺の事を尊敬…いや崇拜している後輩と言えるだらう。

しゅん太『沖縄がゾンビだらけになつてやつとお師匠さまのB級ホラー知識が生かされる時代がやつて來たでやんすね…』

俺『いや知識つて言つても実際生き残る為にはそれだけじゃ…』

しゅん太『いやまたまた』謙遜を…おこら見ましたよ～！ネットの小説日記！かなり好評でやんすね…さすが大天才はパンジー達とは一味も一味も違つでやんすね…』

俺『好評つて言つても数にしたらそれほどでも無いぜ！一部の物好き達が読んでくれてるつてレベルだよ…しかも読むのタダだし！』

しゅん太『おこらとお師匠さまが組めば鬼に金棒でやんすね…』

たかゆき『ウッキーー（足は無いけど頼もしい後輩ではないか！）』

俺『確かにしゅん太の乗つている改造車いすはちょっとやそつとの衝撃じや壊れないし、階段だつてスイスイ登れる優れものだからなー！』

しゅん太『おいらの事よりお師匠さまの白爛話が聞きたいでやんす！是非ともお聞かせくださいでやんす！』

俺『えつ？そりか参つたな～…そりだな～…あれは確か俺が…』

しゅん太『さつ…こんな所で油焼つてる場合ぢゃないでやんす…グズグズしないで行くでやんす！』

俺『ぐつ…ー?』

俺達は弟のまわるが住んでるアパートの階段を登り、まわるの部屋のドアを叩いた。

するとまわるが出て來た。

おれの『おひ？ハゲやつと来やがつたな』

俺『つるせーーー』の前歯野郎！』

しゅん太『お師匠さまに向かつて何で口の聞き方だーでつかい前歯
しゃがつてー』

たかゆき『カシキーー（本当にーの姐の弟、前歯でつかーいーー）』

…俺の弟のまわりは腰まで届くゆくウーハーーがかった長い髪の毛
が特徴だった。

しかし長このは髪の毛だけじゃ無い。

前歯もだつた。

その2本の長くて太い前歯は誰が見ても異様にテカく、また隙つ歯
なので

【skiper】

と書つあだ名があつた。

おれの『つるせーーーお前りーーー調子のつてんじやねーーー』

その時、俺がおんぶしていたもにかが田を覚まし、おれの見るなりこう言つた。

もにか『むじむじ』といひはねーなーお前の前歯弟。『こつ口、じょんなくて
前歯で喋つてゐるじやねーの。』

それだけ言つともにかは再びグーグーと寝息を立てて深い眠りにつ
いた。

まさる』……お前のアル中彼女こっから下に放り投げていいか?
『……の後にしうー。』

「がああああ！……」

俺『何だ今のは叫びは！？』

まさる『こんな事してゐる場合、じやない！俺の嫁が暴れて大変なんだ
！何とか部屋の一室に閉じ込めてあるけど……。』

とつあえず俺達はまさるの部屋に入った。

?『ぱーふー。』

俺『うわー！？……何だマコアか……』

まさるの娘の【マコア】である。

現在2歳になつたばかりの赤ちゃんだ。

『マコア、『ぱーふーふー。』』

まさる『あの部屋に俺の嫁を閉じ込めている

まさるが部屋の一室を指差した。

確かにうなり声とドアをバンバン叩く音が聞こえる。

…その時だった…！

『ドッカーン…!』

ドアが壊れて中から轟き始めたまさるの嫁はんが現れた！

「…」

たかゆき『ウッキー（何でパワーだ！）』

俺『お前の嫁はんモロゾンビにならじやねーか！』

まさる『みーわ…（嫁はんの名前）』

俺『仕方ない……逮捕する……』

しゅん太『あつー！【お師匠さまのモリアゲが急にツサワサと伸びてるー】』

たかゆき『ウキキューー（ヒツアーンー）』

俺は瞬く間にまわるの嫁はんを押し倒し、まれるの嫁はんの腕を後ろに持つて来て手錠で拘束した！

俺『ロープを持って来い！足も縛って完全に動きを封じるんだ！』

たかゆきがどこからか持つて来たロープで足を瞬時に縛り上げた！

まれる『みーわーー』

たかゆき『ウシッキーー（一丁あがりーー）』

俺『変なプレイとはひちゃこまつせ（キマッた）』

しゅん太『すげーー！カツコココーーーー』

俺『お前の嫁はんだからこいつおつ殺さないでやつた。ありがたく思え』

しゅん太『やすがお師匠さまーお見事な腕前でやんすー』

しゅん太が嬉しそうに車いすでピョーピョン飛び跳ねた。

しゅん太の車いすは

【ホッピング機能】

がついてくるのだ。

まるぬ『人んちでピヨンピヨン飛び跳ねるんじやねえー』の義足野郎一。』

しゅん太『……はー? すっかり忘れてたー。そう言えばおこらーじて来る時に妙な【ファイル】を拾つたんでやんすー。』

しゅん太は俺に妙なファイルを渡した。

俺『何だこのファイルは? ん? ……うーこれは……?』

レバ30【80年代風ドタバタ「メトリー】（後書き）

新キャラ多し！

そしてしゅん太が渡したファイルとは…？

次回を待て！！

寄生虫（前書き）

どもー。

1ヶ戸半一ホールで家賃払えなくてアパート逃げ出された前の作者です！

小説書こじる場合じやなにはビックリします（^ ^ ^）

寄生虫

【うじ虫型寄生虫】（始祖）

英訳名

Zombie · Maggot

製作者（R&S）

体長2～3ミリ程度

我々が開発した寄生虫の初期型。

アフリカや東南アジアに生息する肉食で動物の皮膚や内臓に寄生する性質のあるハエの幼虫（うじ虫）をベースにして品種改良した物。

【特徴、性質】

通常のうじ虫と外見は変わらない。

別名【ゾンビワーム】とも言つべきこの寄生虫は人や動物、あるいは一部の植物にも寄生する。

寄生されたあるゆる生物は寄生虫により脳細胞を浸食され徐々に寄生虫の支配下に陥る。

その後寄生された生物は一度活動停止状態（死亡）になり、復活した後に細胞を再構築されていわゆる【ゾンビ】と言つ状態になる。

ゾンビの詳しい詳細については次項の「ゾンビ」ファイルに別記。

一度感染すると肉体内部（脳、皮膚、内臓、筋肉、眼球、鼻孔、口腔、）で無性生殖により卵をあらゆる場所で生み散らかし多大なる寄生虫が増えた所でゾンビの状態として【完成】する。

寄生虫は新鮮なたんぱく質などの栄養分を好む為に宿主に生きた人間や動物を襲わせて栄養分を補給する。

その為に宿主は血肉を求めて歩き回る生きた死体になり果てるのである。

□から触手や電気信号を放ちこれにより宿主の脳や神経回路にアクセスして宿主を操作する事ができる。

寄生の際に不必要な脳細胞を破壊するが、容易に獲物を捕食する際、つまり攻撃や防御に有利な記憶は残る場合がある。

【NW】により寄生虫の寄生進行を遅らせる事が可能。

【NW】の詳しい詳細は次項「NW」のファイルに別記。

なおゾンビの住む環境や摂食した生物のDNAを取り込むなど、条件によつてはゾンビを変態（進化）させる事ができ、より強力な個体にする事ができる。

…組織の連中の強力なバックアップによつこ（素晴らしい）の寄生虫が完成した。

わしが子供の頃からの夢だった念願のゾンビを現実世界に作り上げる事ができたのである。

やつこ（の島）を使ってたくさん（の）実験ができる。

考えただけで勃起して来たわい。

R
·
Z

奇生虫（後書き）

わがへやいひだる事ぢ、ひー。

（作者）

「～～【田舎まで取つておへ】（前書き）

お父さんから田舎の要求を承つました。

〔豆缶は最後まで取つておく〕

俺『……これは寄生虫のファイル……!』

まるで『て事せ』のうじ虫の寄生虫に感染するとゾンビにならって事か!』

たかゆき『ウツキー！（わっかりやすい！）』

俺『それにしても面白いファイルだなー！バインダーにはさんどこ！また見つかるかも知れないし！』

まる『お前こうこうの好きだからな』。しかも最後にこれ書いた奴勃起したらしいぜ！どんな変態だよ！』

俺、まあ、気持ちは分からんでも無いがな。

おれぬ『えい！？』

『ブルルルル！』

俺『あつ！？俺の携帯に着信！？【親父】からだ！もしもし！？親父

親父『D吾か?』

俺『俺だよー・まさると一緒にこるよー』

親父『豆の類は持つてゐるか?』

俺『…豆？…ああ～食料袋に豆缶が2缶ほどあるよ』

親父『じゃ　今すぐ実家に豆を持って来なさい』

俺『えつ！？親父今の状況分かつてんの！？』

親父『やかましい！？親父は今すぐ豆を食いたいんだ！豆を使って【豆カレー】を作るんだ！』

俺『まつ…豆カレーって…外はゾンビだらけですんげー危険なんだぜ！？親父の豆カレーの為に俺ら命かけるのか！？』

親父『そうだ。カレーだけにな』

俺『そ…そんなつまんねー親父ギャグ聞いてる心の余裕もねーんだけど？』

親父『ばっかもーん！…ゾンビ如きが何だ！…あんなもん親父は既に3ヶタぐりこやつつけたぞ…』

俺『ええー！？嘘だろー！？』

親父『親父は軍でいつも鍛えてるんだ！…あんなヤワな腐った死体如きに負けるか！それよりも吾！お前まさか死体が怖くて豆を持って来れないとか言うんじゃないだろうな！？』

俺『えつ！？もちろん嘘つてもりだけどー！？』

親父『ばっかもーん！…お前ゾンビと親父どうが怖いと思つてる

んだ！？今すぐ持つて来ないとお前の顔をハチの大群に刺されたぐらにボコボコにして親父のビッグスクーターで引きずり回してやるぞーー！』

俺『わっ…分かつたよー！豆缶持つて行くよー。』

親父『最初からうつ言えば良いんだー！このばかちんがー。』

親父はそう言い放つとぶつきりぼうに電話を切った。

まとも『おっ…親父は何て？』

俺『いつ…今すぐ豆缶持つて来いって』

まさる『何かそれ！？[冗談だろ！？]』

俺『まつ…豆カレーを作りたいって…』

まさる『嘘だろーーー！…ああーでも親父なら言いいかねーーー！…』

俺『親父は豆類が大好きだからな』

たかゆき『ウツキー！？（口の奥のお父さん豆持つて来いってーーーどんなお父さんなのーーー！）』

俺『俺らの親父は立派な口ヒゲを生やしてて、誰に対してもやたら偉そ�で強引で超パワフルな55歳の親父なんだ』

まるる『親父の仕事はアメリカ軍所属の消防士で仕事中の訓練やプライベートですら毎日鬼のように体を鍛えて健康管理も怠らない』
俺『俺達がチヨンボをしたら問答無用でぶつ飛ばされた。基本スパルタで超頑固親父』

まるる『でも確かにあの親父はなら地獄でも生き残れるな』
俺『もう既にゾンビ3ケタぐらいひっかけてるじゃ』

まるる『マジかよー?…ああーでも親父ならやるな。鍛え方が違うもん』

たかゆき『ウッキーー! (ちよつと待つて!) 君達のお父さんはみんなに強いのー?』

俺『うん。バキのお父さんぐらに強いかもな。俺弱いけど』

たかゆき『ウッキーー! (行け!)』

俺『え?』

たかゆき『ウキキー! (だつてそんな強い親父なら絶対メンツに加えた方がいいもん! すげー! もしかしてこのメンツならこのゾンビ地獄を生き残れるかも知れないぞー)』

しゅん太『さすがお師匠様のお父さんでやんす! これで生き残れる確率もグーンと生き残れるでやんす! お師匠様とまた一緒に【風俗】に行けるでやんす!』

俺『し～！』

もにか『ん？ふーぞく？』

俺『いや何でもない！じゃー今から実家に豆缶を持って行こう！俺達は生き残るんだ！』

「～～【豆カレー】（後書き）

お父さんが作る豆カレーはそれなりにおいしいのです。

LV32【血まみれ幼女】（前書き）

久しぶりのアップ！

レバ32【血まみれ幼女】

俺達は豆缶を持ってアパートの階段を降りた。

階段を降りる途中で5体のゾンビが階段を上つて来た！

またる『やべー！ わらわら来てやがるー』

「あああ～」

しゅん太『いはおひはせむでやんすー』

しゅん太は何を思ったのか義足の右足をゾンビの群れに向けた！

しゅん太『義足ミサイルー！』

何としゅん太の義足が【ロケットミサイル】のよつてゾンビの群れに飛んでいった！！

ぐひゃびひゃぶりゅうつーーー！

ゾンビ共は義足ミサイルに押されて一瞬で【ミンチ】のよつになり、周りは【大量のトマトソース】をぶちまけたかのよつになつた！

そして義足ミサイルがブームランのよひでしゅん太の右足に元通り
スボツと収まった。

またる『しゅん太！何だ今の技はー？』

しゅん太『郵便屋さんは強盗に狙われやすいから護身用でやんす！
義足ミサイルは強力な技でやんすがエネルギーの消耗が激しいから
多用はできないでやんす！』

またる『これは武器つーか兵器のレベルだなー』

俺『…これ強盗に使つたら明らかに過剰防衛と兵器所持で捕まるだ』

たかゆき『ウキキー！（戦う障害者ー）』

なんとか血肉だらけの階段を降りると何やら歌が聞こえた。

?「ばくばくもじもり～みんな食べるよ よ」

俺『ん？』

?「ずるずるべたべた～腸が飛び出す

またる『駐車場の方から昔に流行つてた歌が聞こえる…しかも歌詞
が若干違つよくな…』

俺『マザーグースの童謡並みのエグさだな…』

まれる『あつー…小れな【幼女】が俺の車の前で【縄跳び】してゐ
ー…』

俺『Iの子 隣に住んでるHちゃんだーてつきり襲われたと思つ
たけど無事だつたんだー』

まれる『おこ…あの子 様子が変だぞ? 歌いながら縄跳びしてゐ
る…呪元に【死体】がある』

俺『しかも腹がぽっかりあいた死体だ…』

俺『Hちゃん? 本当は俺達が襲われてる時助けに
やべりや田玉 飛び出す』

俺『Hちゃん? 本当は俺達が襲われてる時助けに
行ひと思つたんだけどね。周りの汚い大人達の圧力で…』

俺達はHに近づいた。

あるとHやんの口の周りは口がベッタついていた!

俺『血ー…』

まれる『Iの子【腸で縄跳び】してゐー』

Hやんが一瞬口と血だけの口を開けて笑つた。

すると猫娘のように口が割けて鋭い牙がズラリと並んでいた！

俺『何でそんな事に！？』

さうにHIIかやんの目は大きくなりてつり上がり、耳も尖つてさう

H//ちやん＼シャアアー！！

まさる『もう人間じやない！』

ハサウエー達のお肉もちょいだい

しゅん太『義足ミサイル！！』

しゅん太が義足≡サイルをエ≡かやんに向けて勢いよく飛ばした！！

—シルクのアーチーは、ハリウッド

エミちゃんが腸の繩跳びロープを目の前に突き出し、真横にピーンと張った状態にした！

義足ミサイルがエミちゃんに飛んで来た！

ピーンー！

何とエミちゃんは義足ミサイルを腸で防いだのだ！！

逆に義足ミサイルは弾かれてそのままブーメランのように俺達に向かって来た！！

一同『うわあーーー！』

ドッカーンー！

俺達は間一髪で弾かれた義足ミサイルをかわした！

コンクリートの地面には義足ミサイルが突き刺さっていて地面には大きなヒビがいくつも入つていた！

俺『こいつ一腸でミサイルの弾道を変えやがった！』

『ああ、この猫娘みかけによらず強いぞー。』

しゅん太『オイ!ラの義足!!サイルが効かない…?…エーン…』

しゅん太は泣き出してしまった!!

H///りやん／＼監さんポックリまた明日 あの世で何でしょうね~?

H///りやんが鋭い爪を振りかざして俺達に向かって来た!!

LV32【血まみれ幼女】（後書き）

義足ミニサイルが舞い、血まみれ幼女が腸で縄跳びをする展開はまさにB級ホラーの世界ですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6888t/>

【琉球・オブ・ザ・デッド】

2011年11月20日07時13分発行